

生きる力を育む芸術文化  
～ワクワク、ドキドキの芸術文化を目指して～

提言書

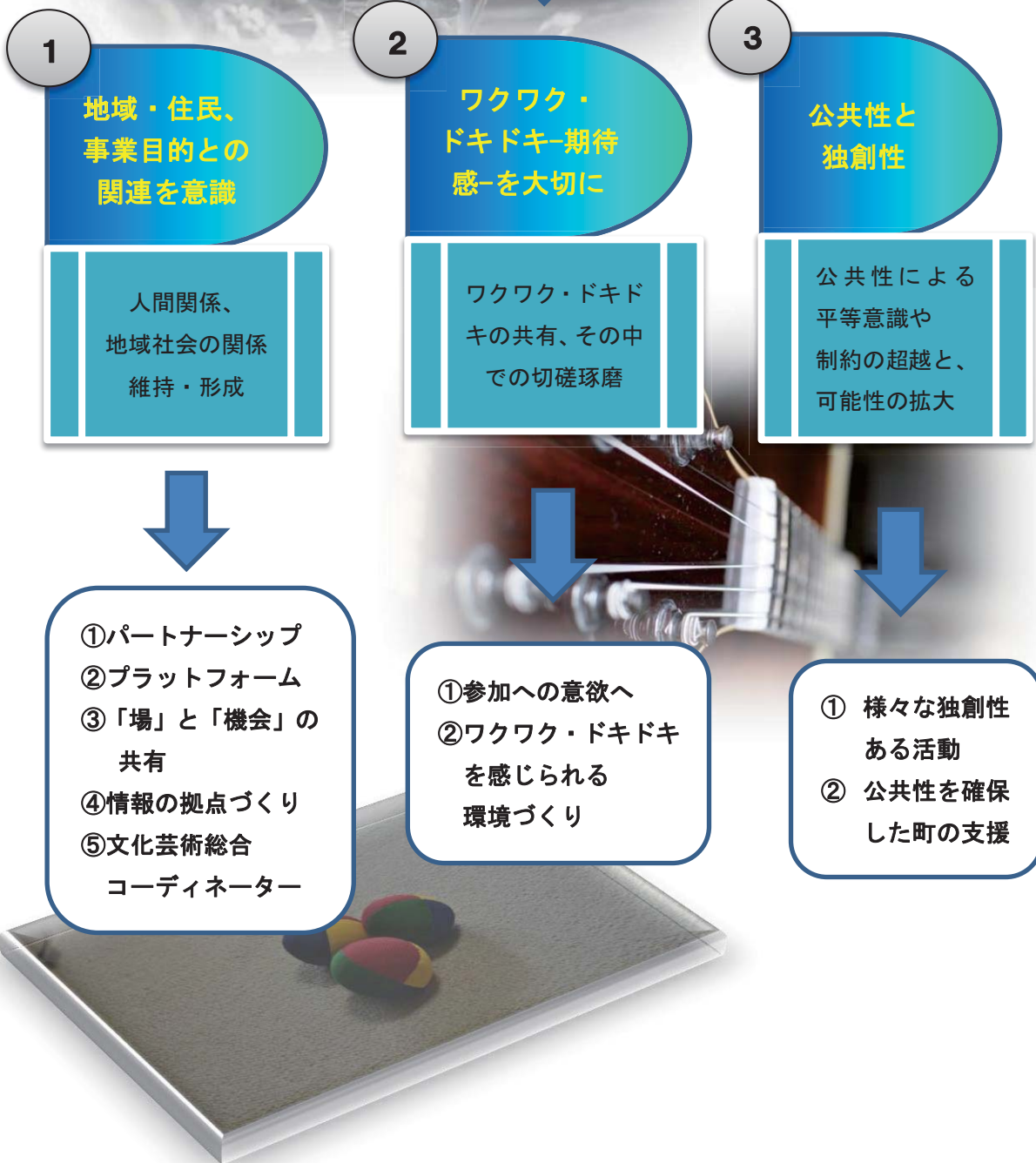
平成 27 年 3 月

三芳町芸術文化懇談会

政策研究所「芸術文化」プロジェクトチーム

# 芸術文化政策提言概要

## 芸術文化は生きる力を育むこと



## 目 次

1	はじめに	3
2	三芳町について	4
2.1	住民の特性	
2.1.1	人口、世帯	
2.1.2	産業	
2.1.3	地域特性	
2.2	三芳町の芸術文化活動を振り返って	5
2.2.1	郷土の伝統芸能活動	
2.2.2	地域の芸術文化活動	
2.2.3	子どもの芸術文化活動	
2.2.4	文化会館の開館とその後の活動	
2.3	芸術文化政策の現状	12
2.3.1	国及び県の芸術文化政策	
2.3.2	町の芸術文化政策	
3	芸術文化懇談会・芸術文化プロジェクトチームの活動について	14
3.1	学習会	
3.2	芸術文化ローカルカフェ	15
4	考察	17
4.1	課題と視点	
4.1.1	生きる力を育むために ～芸術文化活動でどうするか&芸術文化活動をどうするか～	
4.1.2	芸術文化活動を進めるにあたって	
4.2	3本の柱	20
4.2.1	地域・住民と事業目的との関連性を意識する	
4.2.2	ワクワク・ドキドキ期待感を大切にする	
4.2.3	公共性と独創性を尊重する	
5	まとめに代えて	24

## 1 はじめに

日本は、バブル経済崩壊後の不安定な景気状況、右肩上がりの成長を目指す社会から持続可能な社会への転換など、社会・経済情勢は大きく変化し、また、それに伴い、人々の価値観や生き方も様変わりしてきた。少子高齢化や自然災害など様々な不安を抱える一方、心の豊かさや自分らしい生き方を求める人々が増える傾向にある中、文化や芸術は、鑑賞や趣味の対象としてだけでなく、都市政策や市民生活の中で、より大きな役割を担うようになっている。

三芳町には素晴らしい伝統文化や歴史があり、様々なサークルや団体が活発に活動し、公民館や文化会館では質の高い芸術文化を住民に提供している。こういったベースを基に、三芳町の歴史・文化・芸術・生活が一体となった芸術文化薫る豊かな町となるには、どのようなことが必要なのだろうか。

2か年にわたり、芸術文化懇談会と政策研究所「芸術文化」プロジェクトチーム（以下、PT）において検討してきた結果を、ここに提言書としてまとめる。

## 2 三芳町について

まず、三芳町がどのような町であるかについて示す。

### 2.1 住民の特性

#### 2.1.1 人口、世帯

- 人口：約 38,000 人。うち、川越街道よりも東側（駅側）に居住する人口割合が 72.5%。中でも、藤久保地区居住者が全体の 55.9%を占めるが、居住歴 10 年未満の割合が、竹間沢地区に次いで多い。（2010 年国勢調査、2008 年三芳町住民意識調査）
- 世帯数：約 15,500 世帯（1 世帯当たり 2.47 人）。世帯数の分布は、人口の居住地分布と大きな差はない。（2010 年国勢調査）
- 昼間人口：約 43,800 人であり、昼間人口比が 113.08%となっている。（2010 年国勢調査）
- 児童・生徒数：平成 16（2004）年度では 3,000 人を下回る状況であったが、平成 17（2005）年度より増加傾向に転じ、平成 25（2013）年 5 月 1 日現在で 3,403 人。（平成 25 年度教育要覧三芳教育）
- 高齢者人口割合：平成 23（2011）年に 8,195 人、高齢化率 20.9%である 65 歳以上人口は、平成 30（2018）年に 11,035 人、高齢化率 24.1%と緩やかに増加していくと予想されている。（三芳町高齢者福祉計画・第 5 期介護保険事業計画）

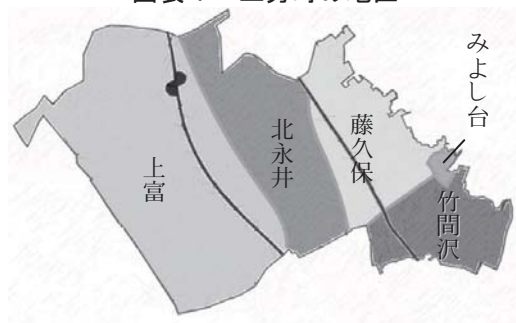
#### 2.1.2 産業

- 第 3 次産業就業者が全体の 66.3%を占め、依然増加傾向にある。
- 第 1 次産業就業者は全体の 3.5%であり、周辺市と比較しても高い数値となっている。就業者のうち 48.7%を上富地区が、21.5%を北永井地区が占めている。
- 三富開拓地割遺跡（埼玉県指定文化財）を有し、伝統的に農業が盛んな町であり、「富の川越いも」をはじめ、数多くの野菜を栽培・出荷している。

#### 2.1.3 地域特性

明治 22（1889）年に上富村、北永井村、竹間沢村、藤久保村の 4 村が合併し、三芳村を経て三芳町となった。現在では、これにみよし台が追加された 5 つの大きな地区として、大字名が存在している。ここでは、これらの地区の特性について示す。

図表 1 三芳町の地区



- 上富地区：町の西部に位置。最も広い面積を占める地区。大半は市街化調整区域であり、地区面積の半分以上が農地と平地林。農地のほとんどは農業振興地域

に指定され、農業的土地利用が主体。しかし、西端、北永井地区境には流通施設等もみられる。面積 6.9k m<sup>2</sup>、人口 3,539 人、人口密度 512.9 人/k m<sup>2</sup>。

- 北永井地区：町の中央に位置。地区東部に市街化区域があり、住宅開発がされている。町道幹線 4 号線沿いに古い集落が発達しており、農地や平地林がある。上富地区に次いで、武蔵野の景観が残されている。反面、町道幹線 3 号線沿いの林地には、倉庫・工場等が立地している。面積 3.0 k m<sup>2</sup>、人口 6,929 人、人口密度 2,309.7 人/k m<sup>2</sup>。
- 竹間沢地区：地区北側及び地区東側、主要地方道浦和・所沢線沿線に工場地域が形成されている。地区北側については、昭和 52（1977）年のみずほ台駅新設により住居系建物立地が増加。住居と工場が混在している。地区南側には集落があり、農地が残っている。面積 1.8 k m<sup>2</sup>、人口は 4,239 人、人口密度 2,355.0 人/k m<sup>2</sup>。
- 藤久保地区：鶴瀬駅から最も近く、面積は町の 2 割ほどだが、人口は 5 割強を占めている。市街化区域がほとんどだが、市街化区域内にも農地が多く残されている。公共施設の整備が進んでいる。面積 3.2 k m<sup>2</sup>、人口 21,529 人、人口密度 6,727.8 人/k m<sup>2</sup>。
- みよし台地区：町の最東部に位置。みずほ台駅に最も近い地区。全域が市街化区域でマンション等大規模集合住宅が大半を占めている。面積 0.1 k m<sup>2</sup>、人口 2,051 人、人口密度 20,510.0 人/k m<sup>2</sup>。

## 2.2 三芳町の芸術文化活動を振り返って

三芳町の芸術文化活動として受け継がれてきているお囃子や車人形などの郷土芸能をはじめ、公民館や集会所、自宅等を拠点として行われている地域の芸術文化活動、学習過程の中ではもちろんのこと、PTA 会員を中心に芸術文化活動の鑑賞が行われてきた学校における芸術文化活動などがあげられる。それに加え、平成 14(2002)年に文化会館コピスみよしが開館したことをきっかけに、従来社会教育活動の中で取り組まれていた芸術文化活動そのものが中心となった取組みが始められてきている。

以下では、それぞれの芸術文化活動がどのようなものなのかについて示す。

### 2.2.1 郷土の伝統芸能活動

町には竹間沢・藤久保・北永井・上富の各地区に「お囃子」が、竹間沢の前田家に「里神楽」と「車人形」が伝承され、現在も活動が行われている。

#### (1)お囃子

竹間沢・藤久保・上富地区では江戸後期に伝えられたとされている、旧来のゆったりしたテンポの「古囃子」。北永井地区に幕末から明治にかけ各地で盛んに創作された速いテンポの「新囃子」。すべて町の無形文化財に指定され、各地区の保存会で現



在も地元の祭礼等に参加し、活動を進めている。また、郷土芸能保存会において交流を深め、後継者育成についても各地区で、農家青年を中心に地道に進められている。

### (2) 里神楽

竹間沢の前田家は里神楽の家元を務める家系で、少なくとも百数十年に遡って行われ、祭礼の際に近郊の村々はもちろんのこと、東京の多摩地方まで舞を奉納し、また踊りや囃子の指導も行っていた。現在でも近隣の神社で舞を奉納し、舞台公演も行っている。

### (3) 車人形

幕末安政年間、竹間沢の前田左近に嫁いだ“テイ”がきっかけとなり、「吉田三芳座」として人形芝居興行を行い、その後車人形の用具一式を作り、各地で車人形興行が盛んに行われた。しかし、時代の流れから大正 10 (1921) 年頃に途絶え、昭和 47 (1972) 年に県の調査をきっかけに復活公演が行われ、以来車人形保存会により守り継がれている。近年、小学校の授業で保存会が協力をして体験教室を行ったり、毎年行われる車人形公演（教育委員会、コピスみよし共催）に向けて、一般の参加者を保存会が募集し、実際に人形の操り手で出演などを行い、後継者の育成も行っている。



《上から》 写真1 お囃子、  
写真2 里神楽、 写真3 車人形

## 2.2.2 地域の芸術文化活動

昭和 40 (1965) 年に開館した旧中央公民館や地域の集会所で、婦人会や同好の仲間により俳句・短歌・書道・美術・民謡民舞などの活動が行われるようになった。昭和 54 (1979) 年には文化協会が結成されている。文化協会では、毎年文化協会まつりや町民文化祭を開催し、所属団体数は4連盟7団体、総勢 529 名（平成 25 年 5 月現在）となっている。

また、PTA の活動として、教師が中心となった合唱活動が保護者と共に取り組みられ、その後、公民館でいわゆるママさんコーラスが結成された。昭和 58 (1983) 年の藤久保公民館開館をきっかけに、合唱等の音楽団体が増加し、音楽活動による青少年健全育成を目指し、芸術文化活動に町が補助金を出して「三芳町吹奏楽団」が結成された。芸

術文化活動はその後公民館を活動の中心として様々な取組みが行われた。実施形態も町民と共に取り組むスタイルが模索され、「名作映画とサロンコンサートの夕べ」や「竹間沢マンスリースクウェア」が生まれ、地域の芸術文化鑑賞事業が継続して取り組まれるようになった。

写真4 町民文化祭



写真5 竹間沢マンスリースクウェア



写真6 ミヨレンジャー



写真7 トライオン劇場

### 2.2.3 子どもの芸術文化活動

子どもの芸術文化活動としては、保育所や児童館、学校での活動をはじめ、地域でのサークル活動が挙げられる。

#### (1) 学校における芸術文化活動

町内の全5小学校とも6年生全員が鼓笛隊の活動を行い、運動会での鼓笛隊発表に向けて、音楽の時間のみならず休み時間や放課後、総合的な学習の時間を活用して熱心に取り組んでいる。特に、三芳小学校においては昭和40年代より鼓笛隊が存在し、親子二代にわたって経験している家庭も多い。鼓笛隊活動を通じて努力することや最善を尽くすことで、

写真8 小学校鼓笛隊





思いがけない自分の力を出せるという自信が付き、また友だちとチームワークをつくることや世代間交流を図ることで人と人との絆を深めることもできるなど、いきいきとした人格形成につながっている。

全3中学校では吹奏楽部が盛んに活動し、コンクール出場や各種演奏会などを開催している。老人ホームや幼稚園への出張演奏や、3校合同での演奏会の実施など、外部との交流も積極的に行っている。校内合唱祭（合唱コンクール）では町内音楽会への出場を目指し、クラスごとに団結して目標達成に向けて励んでいる。

本物の生演奏にふれることができるアウトリーチ活動（詳細は後述）も実施されており、児童・生徒からの評判も良い。このアウトリーチ活動をきっかけとして、授業では普段扱われないものに触れるなど、新たな芸術文化への接触の機会ともなっている。

他にも、郷土芸能と関連性をもたせた取組みにより伝統芸能への想いを学ぶなど、芸術文化活動としてだけでなく、地域をより深く知るための活動が行われている。

## (2) 保育所における芸術文化活動

保育所は、保護者支援の場である一方、次代を担う子どもたちが現在を最も良く生き、望ましい未来を作り出す力の基礎を培う場である。保育所運営の要である保育所保育指針<sup>ii</sup>には、そのための原則や目標、内容の他、様々な規定が明記されている。その中の「表現」という項目では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と定義され、絵画、造型、音楽、演劇の他、様々な芸術文化活動について明記されている。

昭和47（1972）年、第一保育所（現在閉所）開設以来、現在町内5つの保育所（公立2、私立3）では、上記の保育所保育指針に沿って子どもたちも楽しく芸術文化活動に触れられるように、お絵かき、泥だんご作り、粘土遊び、色水あそび、わらべ歌、季節や行事のうた、おままごと（ごっこ遊び）など生活や遊びの中での活動をはじめ、お店屋さんごっこの品物作りやおひな様作りなど行事に向けての制作や、年1回開催されるお遊戯会（または生活発表会）での、歌、踊り、合奏、劇ごっこ等の発表など、年齢や発達に応じた取り組みを行っている。

また、町内3か所の私立幼稚園においても幼稚園教育要領<sup>iii</sup>に沿って保育所同様に芸術文化活動に取り組んでいる。

## (3) 児童館における芸術文化活動

昭和53（1986）年、児童館・学童職員による人形劇の公演「トライオン劇場」が始まった。普通の人形劇だけでなく、影絵や台詞なしのボードビルなど毎年内容に工夫を凝らし、三芳町の子ども達に芸術文化に触れる楽しさを伝えてきた。親子にとって毎年恒例の楽しみな事業として定着していたが、年数の経過とともに正規の児童館職員の減少に加えて、学童保育室児童数の大幅な増加に伴い学童職員の仕事量が増加したことで、次第に事業継続が困難となり、平成20（2008）年度の「トライオン子

育て広場」を最後に 23 年間の活動に幕を降ろした。

昭和 57（1982）年度に富士見市の人形劇団「どん」の関係者の協力のもと、藤久保児童館人形劇クラブが立ち上げられた。当初はクラブ員も集まり、活発な活動だったが、時代の移り変わりとともにクラブ員が減り続けていき、平成 24（2012）年度は 5 名となった。正規職員の他の仕事とのバランスを考慮し、平成 24 年度をもって 31 年間の活動に幕を降ろした。現在、北永井児童館・竹間沢児童館では一輪車クラブの活動が継続しており、毎年 5 月に開催される子どもフェスティバルにおいて集団演技の発表を行っている

この他、児童健全育成の一環として、プロによる演奏やパフォーマンスの鑑賞、レクゲーム大会や工作教室・クッキング・異世代交流等の様々な体験活動、実行委員会活動を通じた自主性・自律性・協調性の育成等に取り組んでおり、平成 21（2009）年度には児童館 OB がローカルヒーロー「入間野戦隊ミヨレンジャー」を結成し、町内各地域の祭りや児童館まつり、みよしまつり等での発表を目標にした自主的な活動へとつながっている。

#### (4) その他の芸術文化活動

毎年 5 月に開催される子どもフェスティバルでは、保育所園児による踊りの発表、児童館一輪車クラブによる集団演技の発表、地域のキッズダンスサークルによるダンス発表（ヒップホップ、タップ、フラなど）が行われており、大勢の子どもたちが出演する芸術文化活動の発表の場となっている。

### 2.2.4 文化会館の開館とその後の活動

昭和 60（1985）年頃には文化会館（劇場）の構想が浮上していたが、図書館・竹間沢公民館・庁舎建設が先行した。その後、平成 10（1998）年に計画が固まり、翌年には建設が始まった。平成 14（2002）年 4 月 21 日、芸術文化活動の拠点（劇場）として文化会館コピスみよしが開館した。

このプロジェクトは、町においてハード・ソフト面を合わせた総合的な芸術文化活動のスタートといえるが、十分な準備を踏まえて進められた訳ではなく、建設の最中に運営に関する方針「三芳町文化会館運営基本方針」が定められたのみだった。この基本方針では、文化会館の役割を「町民のための文化・芸術活動の場」とし、

写真 9 コピスみよし（三芳町文化会館）



①地域の文化・芸術活動の発表の場

②多様な要求に応える文化・芸術のふれあいと鑑賞の場

### ③町民自らが多様な形で参加し、育ち合う文化・芸術活動の創造と交流の場

と定められた。この役割は現在においても文化会館の方針に位置付けられ、様々な活動が展開されている。平成 22 (2010) 年より、それまでの町の直営から「東京ドーム・トールツリーグループ」を指定管理者に置き運営されている。

平成 24 (2012) 年、開館 10 周年を迎えたコピスみよしは、これまでにどのような活動を行ってきたのか、発表・鑑賞・参加という本来の目的から見ていく。

#### 写真 10 合唱祭-みんなで創るうたまつり-

##### ●発表

平成 14 (2002) 年 4 月 21 日のこけら落とし公演では、フルート、ダンス、合唱など地域の文化活動サークルなどが日頃の活動の成果を発表した。以降、「合唱祭-みんなで創るうたまつり-」「高校演劇フェスティバル」や「のどじまん」、「コピスの風コンサート」など、発表の場はこれまでの総事業数の約 3 割にものぼり、住民とともに歩む文化会館であることを印象づけている。



##### ●鑑賞

町の郷土芸能である竹間沢車人形や、オーケストラ、吹奏楽、ポップス、落語、演劇など多岐にわたるジャンルで、それぞれ著名なアーティストを招聘し、上質の芸能を鑑賞する機会を提供している。車人形とデーモン小暮氏との異ジャンル共演や、ワークショップを通じてスキルを身につけた一般の人とプロが共演するなど、創意工夫をこらした鑑賞の場を制作していることが特徴として挙げられる。

##### ●参加

著名なアーティストを講師に招き、楽器やオペラ、落語などのさまざまなワークショップ（体験型講座）を積極的に行い、芸術文化の入り口となる知識や体験の機会を提供している。一流の芸術を手の届く距離で体験することや、他者と共に芸術活動を行うことは、表現力を養うためにとっても大切な取り組みである。

開館 5 周年記念事業として音楽大学と共同して取り組んだ第九の演奏活動は、初めて歌うメンバーはもとより、町内の音楽シーン

#### 写真 11 コピス de 映画撮影風景



において画期的な取組みであった。「コピス de 映画プロジェクト」では、第一線で活躍しているプロフェッショナルを招き、6歳から80歳までの幅広い世代によって構成された地域住民と一緒に映画という芸術作品を創りあげている。

参加の場として、“やりたいことをできるようにするためにはどうしたらいいか？”をコンセプトに、講師が全てを教えるのではなく住民自身が考える力を養うことに重きを置いた活動としている。また、参加住民の家族にも後方支援を呼びかけ、ケータリングや衣装の手配を協力してもらうなど、直接的な参加者のみではなく周囲の者も芸術創造活動に参画し、芸術文化活動の楽しみを拡散的に共有できるような場となっている。

さらに、以上の3つの目的を踏まえた取組みとしてアウトリーチ事業が挙げられる。これは、各世代にわたる育成の場として、コピスみよしの多種多様な事業の中でも特に力を入れている事業である。アウトリーチとは「手を伸ばす」という意味があり、公共ホールが住民との新たな接点を求めて、住民の活動の場に自ら入り込んで行き、芸術への関心を飛躍的に伸ばそうという活動である。これは、主に「小学校音楽アウトリーチ事業」と「中学生芸術鑑賞会」、「ロビーコンサート」に代表される。

小学校音楽アウトリーチ事業では、大人数で鑑賞できる体育館ではなく、あえて各小学校の音楽室で5年生のみを対象に実施している。それは、プロのアーティストによる本物の歌や楽器演奏の迫力を、まさしく手の届く距離で、感受性豊かな子どもたちが体験することが、芸術から導き出された創造性を通じて笑顔(=心の豊かさ)につながっていくからである。また、ただ鑑賞するだけでなく、アーティストと一緒に楽器や歌で共演する場で、仲間とともに目標を達成できたときの喜びを知る。それは将来の人格形成において必ず良い方向に作用することである。

写真 12 小学校音楽アウトリーチ事業



中学生芸術鑑賞会は、コピスみよしのホールに全中学校の1年生を集めて実施している。これは実演だけでなく、その空間も直に体感すべく、レセプションやプログラム配布などを実際のコンサートと同じ環境で構成し、大人への第一歩に向けた社会的マナーを育むことも目的としているためである。また、国内トップクラスのアーティストが実演だけでなく、プロになるまでの自身の体験談や楽曲分析などを語るなど、通常の音楽の時間では学ぶことのできない学習の機会にもなっている。

ロビーコンサートは、誰でも気軽に音楽を楽しめるよう、開放スペースにて入場無料で行っているコンサートである。当初はコピスみよしのロビーで行っていたが、平成25年から、普段は文化施設に行くことがない人にも芸術文化の楽しさを知ってもらえ



写真 13 ロビーコンサート



るよう、イムス三芳総合病院やユニクス三芳など、町内のさまざまな場所で開催するようになった。逆に、コンサートを聴くために旧池上家住宅や三芳町議会議場に初めて足を踏み入れ、自分たちの住んでいる町がどんな場所かを理解するきっかけにもつながっている。出演者はいずれも国内を代表するクラスのアーティストであり、町内で活動している文化団体や個人を共演者とするこ

ことで、文化レベルの飛躍的な向上を図っている。アウトリーチ事業は、3つの目的を複合的に絡めた取組みでもあり、今後さらに活発な事業となっていくことが望まれる。

全国の文化施設の、平均的な年間自主事業数は11事業という調査結果<sup>iv</sup>がある中、コピスみよしの平成25年度の自主事業数は21事業で、1つの事業が複数回にわたるものもあり、実に60日におよぶイベントを開催している。

市民への貸し館としても、地域の文化団体の練習・発表会の場であったり、ホールのアコースティックな音響が最適な環境であるという音楽業界の高い評価により録音に使われたりするなど、全国的に見ても非常に稼働率の高い文化施設となっている。

平成22(2010)年に指定管理者制度に移行し、一時的に町としての係わりが少なくなり指定管理者任せのところも見受けられた。しかし、全国の多くの文化施設が、舞台芸術公演を実施することだけが目的となっている中で、文化施設設立の本来の目的である「地域の芸術文化活動の振興を図る」ことを改めて認識し、地域に根づいた創造的で独自の芸術文化事業を町と指定管理者が協力して推し進めている。

## 2.3 芸術文化政策の現状

町や県などの地方自治体や全ての事業は、政策のもとに行われている。この政策は、法律や条例、計画、方針などに明文化されて示される。ここで、国及び県、そして三芳町の芸術文化政策がどのようなものであるかについてまとめる。

### 2.3.1 国及び県の芸術文化政策

平成24(2012)年6月27日、「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」(以下、劇場法)が公布・施行された。この劇場法は、文化芸術振興基本法<sup>v</sup>にのっとり、劇場、音楽堂等の活性化を図ることにより、我が国の実演芸術の水準の向上等を通じて実演芸術の振興を図るため、劇場、音楽堂等の事業、関係者並びに国および地方公共団体の役割、基本的施策等を定め、もって心豊かな国民生活および活力ある地域社会の実現ならびに国際社会の調和ある発展に寄与することを目的として制定された法である。



これまでの我が国では、主に施設の整備が先行して進められてきた。しかし今後は、そこで行われる芸術文化活動や、劇場、音楽堂等の事業を行うために必要な人材の養成等を強化していく必要があるため、この劇場法が制定された。

劇場、音楽堂等を巡る課題を克服するためには、「個人を含め社会全体が芸術文化の担い手である」ということが国民に認識されるように、劇場、音楽堂等を運営する者、芸術文化活動を行う団体および個人、国および地方公共団体、教育機関等が相互に連携協力して取り組む必要がある。

劇場法には義務規定・必置規定はないが、法の定める趣旨に沿って、劇場、音楽堂等の活性化を図り、そこで行われる実演芸術を振興することを目的に、文化庁より各団体に通知されている。

一方、埼玉県においては、文化芸術振興の基本理念や県の責務が盛り込まれた、議員提案による「埼玉県文化芸術振興基本条例」が平成 21 年 7 月に施行された。平成 23 年 4 月には「埼玉県文化芸術振興計画」が策定され、「文化芸術振興の諸施策を展開し、心豊かで活力ある埼玉」を目標に掲げ、(1) 県民の自主性の尊重 (2) 地域資源や特性の再発見 (3) 文化力の活用という基本的視点を踏まえた各施策が展開されている。

また、県には彩の国さいたま芸術劇場等を代表とする各文化施設等があり、これらと県民、文化芸術団体、県、市町村、NPO などと連携が図られている。

### 2.3.2 町の芸術文化政策

町の芸術文化政策は、文化会館開館時に策定された「三芳町文化会館運営基本方針」に一部述べられていたほか、平成 24 (2012) 年策定の「三芳町教育振興基本計画」には「確かな学力と自立する力の育成」の一つとして、「伝統文化の尊重と国際性を育む教育の推進」を謳っている。また、「生涯学習の振興と社会教育の充実」の一つとして「芸術文化の提供と創造」を、「文化財の保護と郷土学習の推進」を通じた「文化財の活用と郷土学習の推進」を挙げ、豊かな知性と感性を育む人の育成と生涯学習社会の形成を目指している。なお、平成 18 (2006) 年に策定された、町の最上位計画である「三芳町第 4 次総合振興計画」の中では「芸術文化の提供と創造」について示され、活力のあるまちづくりを目指している。

これらの計画が推進されている最中である平成 25 (2013) 年、三芳町芸術文化懇談会及び政策研究所内に芸術文化 PT が立ち上げられた。

### 3 芸術文化懇談会・芸術文化プロジェクトチームの活動について

平成 25 (2013) 年、学識経験者と住民を中心とする 11 名で構成された芸術文化懇談会、及び政策研究所の研究テーマのひとつとして、9 名の職員で構成された芸術文化 PT が立ち上げられた。三芳町の限られた財源・資源の中で、地域特性を生かした文化や芸術をいかに創造・展開していけるかを研究目的とし、それについて 2 か年をかけ審議・提言することが求められた。

この 2 か年の懇談会と PT の会議だけでも、開催延べ回数は 30 回を優に超える。様々な背景をもった懇談会委員と、あらゆる部署から参加した芸術文化 PT の研究員は、調査・研究・討議に加え、様々な活動を行ってきた。

現在町内で行われている芸術文化活動を実際に見る機会として、小中学校で行われたアウトリーチ活動やロビーコンサートなどの視察も行った。特にアウトリーチの視察では、それぞれが訪問した学校の音楽室で、子どもたちの手の届く距離でプロが楽器演奏をしたり、音楽にまつわる話を分かり易く、楽しく教えるといった内容に、その意味や良さを実感した委員、研究員も多かった。また、芸術文化に関心のある住民を交えた学習会や討議、「芸術文化ローカルカフェ」の開催等の活動に取り組むことにより、より実効性と意味のある提言を目指して活動した。

#### 3.1 学習会

東京大学大学院人文社会系研究科、小林真理准教授をお招きし、芸術文化とまちづくり、その意義と役割について、ともに学び、考えることを目的として学習会を開催した。

小林氏は、広く文化の発展を支える、あるいは阻害する制度・仕組み（補助金、法人化、指定管理者制度、行政評価等）全般に関する研究や、公共政策としての文化政策を現実の社会の中で行っていく場合の原理原則及び方法論に関する研究、文化政策を執行していく機関及びアクターとしての行政そのもの、劇場及び美術館等の芸術機関、「市民」の研究を専門とされている。学習会は、小林氏の講演を主として実施し、講演直後には芸術文化懇談会を開催、意見交換を行った。

本学習会の開催概要は、下記の通りである。

##### 【開催概要】

日 時：平成 25 年 12 月 4 日（水）14：00～16：00

場 所：三芳町役場 3 階 301 会議室

参加者：25 人

写真 14 学習会



内 容：テーマ「地方自治体における芸術文化活動の意義と役割」

主 催：三芳町教育委員会、三芳町政策推進室（政策研究所）

本学習会には、委員や研究員はもちろん、芸術文化に関心をもつ住民の方にも参加いただくとすることができた。参加した人はそれぞれ、芸術文化のもつ可能性や将来展望などに気付いたり考えたりするきっかけとなっていたようであった。

### 3.2 芸術文化ローカルカフェ

懇談会及び PT の提言に向けた住民の意見を聞く場として、以下の目的をもって芸術文化ローカルカフェを開催した。

- ① 懇談会や PT の討議を住民にも広げる
- ② 素材探し
- ③ 事業探し
- ④ 参加者同士の連携を目指す場として

本物のカフェのように、リラックスした雰囲気の中でテーマに沿って自由に語り合う

「ワールドカフェ」方式を用い、世界（ワールド）のことではなく、地域（ローカル）のことを考えていきたいという思いをこめて「ローカルカフェ」と名づけた。

また、参加者が「生きる力を育む」というテーマに対する共通認識をもちやすいように「子ども」をキーワードとし、それを接点として意見交換が行われた。

開催概要は、下記の通りである。

#### 【開催概要】

日 時：平成 26 年 9 月 28 日（日） 9：30～12：30

場 所：藤久保公民館ホール

参加者：62 人

内 容：テーマ 1 「子どもにとってすてきなまちってなに？」

テーマ 2 「子どもにとってすてきな芸術文化ってなに？」

主 催：三芳町芸術文化懇談会、三芳町政策研究所、三芳町、三芳町教育委員会

協 賛：株式会社 ケイミックス、株式会社 木村屋總本店、株式会社 十勝大福本舗、株式会社 ヤオコー 三芳藤久保店

（開催に際し、以上の企業より人的・物的支援をいただいた。）

テーマのキーワードを「子ども」としたことで、小中学生も本事業に参加した。これにより、小学生から 70 代まで幅広い年代の方々が一堂に会することとなった。10 のグ

写真 15 ローカルカフェ



ループに分かれ、15分間隔でグループのメンバーが入れ替わることで、当事者である子どもの意見はもちろん、様々な年代、様々な立場の住民の意見を広く聞くことができた。はじめはどんな話し合いが行われるのだろうと不安な表情の参加者も多かったが、グループが変わるたび、テーマが変わる毎に活発な意見交換が行われ、最後にはまだ話し足りないという表情に変わっていった。事業アンケートには「普段話す機会のない世代の話が聞けて有意義だった」という感想が多く寄せられた。

本事業により、これまで見ていなかった町の芸術文化の現状はもとより、様々なアイデア、ご意見をいただいたのは大変有意義であったと、委員・研究員共に感じたところである。現時点ではまだ一部の声ではあるが、本提言中の節々には、このローカルカフェでの話が生かされている。

今後も、本事業を継続して開催することで、より住民の意識が深まり、町の芸術文化に対する意識の潮流が生まれることを期待したい。

## 4 考察

### 4.1 課題と視点

三芳町が「芸術文化のまちづくり」というキャッチフレーズを掲げて進めることは、積極的に芸術文化活動を推進していくことに他ならない。このことは芸術文化活動の自由を奪うことになる危惧も含めて幾度となく議論が行われた。芸術文化活動は誰にも干渉をうけることなく自由に行われることが大前提であることをふまえ、様々な施策を進めることである。その一環として、

- ・芸術文化活動に対する支援
- ・幅広い芸術文化事業の実施

などの意見が出された。しかし、単にこれらの施策を進めることを示しても芸術文化活動に関心のない層からの理解を得ることは難しく、住民の相互の合意にはならない。また行政において、昨今の厳しい財政状況の中で、積極的に財政投資を行うことは難しい。

芸術文化活動の価値が、住民や町行政にとって重要であり、「何のために、町が芸術文化活動を推進するのか」という点に絞った研究が重ねられた。

#### 4.1.1 生きる力を育むために

##### ～芸術文化活動でどうするか&芸術文化活動をどうするか～

芸術文化活動は、誰もが自由にいつでも、一人でも複数でも触れたり関わったりすることができる、人間特有な活動である。歌を歌ったり、楽器を奏でたり、作品を創造したりするだけではなく、映画や音楽、演劇、また絵画や美術品を鑑賞することも、立派な芸術文化活動である。そして、芸術文化活動を通して関係し合い、認め合い、育ち合っていく活動であることを歴史から学んでいる。芸術文化活動の成果は目に見えないものと言われがちであるが、三芳町の各地区の伝統芸能である「お囃子」は、江戸時代後期から引き継がれ、いまや町の財産となっている。芸術文化活動の育成は、未来への財産作りといえる。

コピスみよし開館以来、毎年実施されている「高校演劇フェスティバル」。東武東上線沿線の高校演劇部の生徒と教員が実行委員会を組織し、コピスみよしの共催で延べ 65 校、7,000 人が参加している。開館当初、県内いくつかの劇場で同様な取組みが実施されていたが、コンクールを除いて現在はコピスみよしだけの取組みとなり、東武東上線の演劇部にとってはあこがれの舞台となっている。埼玉県では学校の統廃合も進み、演劇部の予算は削減され、顧問の配置もおぼつかず、部の存続すら危ぶまれている学校が多い。しかし、ここに集う各校演劇部の生徒たちは、このフェスティバルに向けて作品の選定から始まり、道具や音楽づくりなど、すべてを自

写真 16 高校演劇フェスティバル





ら作り上げ、当日の発表に立ち向かう。当日は観客からの評価や専門家のアドバイスを  
受け、翌年の作品作りを開始する。年々評価は高まり、観客も増え続け、豊かな内容と  
なっている。また、演ずることはもとより、最寄り駅での誘導やもぎりなど裏方の仕事  
まで多岐に渡る活動を、高校生はいきいきと行っている。

コピスみよし開館から始まった音楽アウトリーチ事業は、すべての小学校5年生が、  
自校の音楽室という手の届く距離でアーティストの演奏を鑑賞し、また自らも歌や演奏  
を披露するといった活動である。体験者は平成27(2015)年で5,000人を越えること  
となる。また、平成24(2012)年度からは、中学1年生がコピスみよしで3校合同の  
鑑賞をしている。吹奏楽の分野では、3年前から中学3校合同の演奏機会が増え、個々  
の学校の実力も向上してきた。

2年間の芸術文化懇談会においては、未来を創る子どもたちに焦点を定め、積極的な  
取組みを行うことが必要とされた。子どもたちをめぐる社会状況はなかなか改善されず、  
子どもたちがいきいきと育っていくために、芸術文化活動の推進も多くの役割を担うは  
ずである。

芸術文化活動によって心の豊かさや、暮らしに潤いが生まれることで、人間関係や地  
域社会の関係が維持され、そのことはまちづくりにも大いに役立っていくと考えられる。  
三芳町には、地域や神社のお祭りなど、様々な祭りがある。どこからともなく笛や太鼓  
の音色が聞こえてくると、「心がウキウキし、気持ちがワクワク」してくる。

毎年、9月第1土曜日に実施される「みよしまつり」は、平成27(2015)年で25回  
目を迎える、町の一大祭りになった。会場の一角にはパフォーマンスを自由に披露でき  
る「ぱふおーまんす広場」があり、様々なジャンルのパフォーマンスが個人・団体によっ  
て披露される。観客と一体となって楽しめ、好評を博している。花火や模擬店など、様々  
な楽しみを共有でき、近年では町外からの来場者も増え、地域経済にも寄与している。そ  
ういった意味で、たかが「祭り」であっても、同時に社会も動く。祭りに対する情熱を持っ  
た人たちの、楽しい思い、熱い思いが、他の  
人々の自分も参加してみたいという気持ち  
に結びつく。これにより「地域にこんなことがあってよかった」「関わってよかった」  
という充足感を得、知らず知らずの間に他者とのコミュニケーションを図ることができ  
る。

写真17 ぱふおーまんす広場



本提言においては、芸術文化活動で生きる力を育み合うことと考えた。

もちろん、生きる力を育むのに、芸術文化活動だけでは十分でない。スポーツ活動な  
どを含めた広義の文化活動が、人間らしく生きていくことができる、人間固有な活動で

あるはずである。

#### 4.1.2 芸術文化活動を進めるにあたって

芸術文化活動で生きる力を育み、人間関係や地域社会の関係が維持され、そのことはまちづくりにも大いに役立っていくと考えた上で、ではどのように芸術文化活動を進めていくのか。三芳町で取り組まれてきた芸術文化活動(事業)について考察することで、問題点を整理し、今後の芸術文化活動(事業)のあり方を探っていきたい。

実施の主体は、大きく4つに分けられる。

- (1) 行政(町、県、国等)
- (2) 団体(サークル団体、NPO 団体、実行委員会等)
- (3) 個人(住民)
- (4) 民間事業者(指定管理者、企業、事業所等)

※各主体が協力・協働する場合もある

開催手法は、大きく分けて、次の3つである。

- (1) 集会参加型：一度で多人数が参加でき、内容を簡潔に周知できる。

例：みよしまつり、子どもフェスティバル、福祉まつり、町民文化祭、マンスリースクウェア

- (2) 体験学習型：人数は限られるが、体感することで深く内容が理解できる。

例：主に社会教育機関(公民館、図書館、資料館)等で開催される講座

- (3) アウトリーチ型：対象のもとへ出向き、普段芸術文化を享受できない住民も参加できる。

例：ロビーコンサート、出前講座

これらの主体、手法によって様々な芸術文化事業が開催され、様々な成果が生み出された一方で、課題や問題点も見受けられる。特に、町が主体となる芸術文化事業に関する課題・問題点には、

- (1) 慣例化、形骸化
- (2) 行政主導
- (3) 対象の限定化
- (4) 非連携・非協働
- (5) 目的・テーマが不明確
- (6) 自主的な活動に対する支援の乏しさ、無関心さ
- (7) 情報伝達の少なさ

というものが挙げられる。

## 4.2 3本の柱

今後、芸術文化活動を推進し、生きる力を育む芸術文化活動のために必要となることは何か。本提言書では、下記3本の柱を示す。

### 4.2.1 地域・住民と事業目的との関連性を意識する

芸術文化活動そのものの役割と共に、芸術文化活動により、人間関係や地域社会の関係が維持・形成されるはずである。住民にとって、いきいきと生きる未来を作り上げるために、5つのポイントにまとめた。

#### ① パートナーシップ

住民が主役となり生きる力を育むためには、個人・団体・行政・民間事業者等が対等な立場を保ち、パートナーシップを共有しなければならない。それぞれが単独でなく協働した形で参加の芽を「種まき」し、共に参画することで「発芽」、各々が役割を持ちながら「花を咲かせていく」こと。このようになると、継続して質のよい花が咲いたり、交配され様々な花が咲くことも可能となり、花が咲いた後の、新たな種となる人やモノを発掘することもできる。ここまでくると、芸術文化活動は人間関係や地域社会の関係を維持・形成するための一つの重要なツールとなり、住民の福祉（幸せ）に結びつくものである。

#### ② プラットフォーム

住民を主体とした芸術文化懇談会と政策研究所「芸術文化」PTの取組みは、三芳町では初めてのものとなる。このような取組みから得た活動の成果や情報を蓄積し、有効に活用するために、町に点在する様々な芸術文化活動の拠点となるプラットフォームの創設は必要不可欠であるが、その構築については十分検討されてから取り掛かることを強く望む。

今回、提言書作成に向けて実施した「ローカルカフェ」など、様々な意見集約が可能な取組みを、自由に楽しく、かつ定期的に実施することは重要である。また、これを中心的に進める役割を担う組織も必要である。当面、この組織を進めるにあたっては、行政内にステーションを置くべきと考える。

#### ③ 発表の「場」と「機会」の共有

日常の芸術文化活動は、公民館や集会所などの公共施設はもとより、個人の場において進められている。その活動を表現するための場所は常に問題となってくる。絵画や写真であれば、街灯や柵、塀などを開放し、イラスト、絵画、写真などを定期的に募集して公開できるようにするなど、共同で発表できる場があると良い。これは、町の観光にも繋がることである。

音楽では、場を単独で確保することは難しいと思われる。なぜなら、活動できる場が現状ではかなり限られているからである。かといって箱モノを増やすことは難しい。したがって、団体などが共同で発表できるようにする。また、いつでも、どこのグループが発表や練習をしているのか見えるようにすること。若い世代限定になるかもしれないが、インターネットを活用することも有効である。そうして、団体同士の交渉ができるようにする。

#### ④ 情報の拠点づくり

芸術文化活動や芸術文化に関わる情報は、受け手や送り手双方にとって、とても有意義なものであろう。より気軽に芸術文化にふれ、より楽しく活動し続けられるようにするためには、町は“いつ、どこで、誰が、どんな芸術文化活動を行っているか”を集約・整理し、それらを広く住民に知らせる。このことにより、住民が知る機会を得られるようにすることこそが、芸術文化活動活性化の第一歩であると考えられる。

その情報発信の手段として、芸術文化活動を知るためのポータルサイト（入口）を用意する。現在、文化施設のホームページは、その施設を利用するための案内（場所・料金・利用方法）が掲載されているに過ぎず、そこでどんな芸術文化活動が行われているかといった細部までは明らかにされていない。そこで、送り手は場所・使い勝手・料金・規模について情報提供し、利用者側が活動に適した施設を見つけることができるよう、また、町のさまざまな場所で行われている芸術文化活動を全体的に見通せるようなポータルサイトを開設する。それにより、どんな活動がどこで行われているかなど、自分に合った活動に参加して行きやすい環境を整えたりすることが期待できる。そして、③で述べた団体同士の交流も促進することができる。

また、文化拠点には「記憶」を保存、共有し、「共感」を創造、発信することが求められている。これまでの、そしてこれからの芸術文化事業がどのような目的をもって成果を為し得てきたか、それらを明確にし、文化拠点の存在意義を広く知らしめる役割も担うことになる。

様々な芸術文化に関わる情報の拠点を立ち上げ、誰もが自由に利用可能なものとして運用することが望まれている。また、それを生かすため、常にメンテナンスを行うことが必要となり、当面は地域の文化拠点であるコピスみよしをキーステーションとすることが望ましい。

#### ⑤ 芸術文化コーディネーター組織の設置

これまでの4つのポイントを実行していくには、町の芸術文化を集約・整理して円滑かつ有効に進めていく組織の設置が必要である。

この組織を（仮称）芸術文化コーディネーター組織とし、地域の文化資源の保存や開拓、住民相互の交流を仲介するコーディネーターとなる。住民のさまざまな芸術文

化活動に自主的に参加していきたいと思えるように誘引していき、有意義な活動を続け、いきいきとした生活を作り上げていくためのきっかけを作っていく。この組織は、専門的知識や経験を有する有識者を助言者としながら、住民が中心となって個々の力では乗り越えていくことが困難な課題を、合議制によって積極的に克服していくことが主な役割である。

#### 4.2.2 ワクワク・ドキドキ期待感—を大切にす

たとえば芸術文化活動において、考えたモノ（発案）をカタチ（目標）にするためには、同じベクトルに向かう人々が集まり、関係しあいながら切磋琢磨し、目標の実現にワクワク感—期待感—を感じて創造・創作する。同時に、カタチを創るまでの経過の中のドキドキ感—期待感—でその喜びを共有し共感する。また、参加者や鑑賞者も、これから何が始まるのか、どんな感動が待っているのか、どんな楽しいことがあるのかという、ワクワク・ドキドキ感を持っている。

芸術文化事業の実施についても同様で、作り手と参加者がワクワク感・ドキドキ感を共有することで達成感が生み出されるはずである。その達成感、それぞれの人々の熱い思いとなる。その熱い思いを持った人が、興味を持っていなかった者を引き込み、「参加したい」という気持ちに結びつける。ワクワク・ドキドキを感じることは芸術文化活動の盛り上がるために必要不可欠なものである。

昨年実施した「芸術文化ローカルカフェ」に参加した中学生たちは、発表の場を求め、指導者を求めている。三芳町の将来を担うこのような子どもたちに、芸術文化活動を通してワクワク・ドキドキを感じてもらうには、日常得られない感動や人生で忘れることができないもの、成人して思い出したときに語り継がれるものとなる活動が必要であり、そのような環境を積極的に作っていかなければならない。

#### 4.2.3 公共性と独創性を尊重する

芸術文化事業は、時に特定の人たちだけが享受しているものと受け取られがちである。行政が主体となって芸術文化事業を行う場合は、公共性を重視するあまり、芸術文化そのものの価値を少なくしたり可能性を狭めたりすることもある。しかし、芸術文化はそのような平等意識や制約を易々と飛び越え、思いもよらない内容に変化し、新たな分野や別の領域と融合しながら活動を広げていく可能性を秘めているものである。芸術文化活動にはそのような側面があることを踏まえ、創造の自由を保障し、時には独創的な視点も重視しつつ、その活動に公共性をうまく含ませ、共有の活動へと進めていくことが求められる。

公共性と独創性のバランスを取るために必要なポイントとして、2点挙げる。



### ① 様々な独創性のある活動

独創性のある芸術文化活動を行う場合、行政が支援に徹し、住民等が行う主体的な活動を前面に押し出すことも必要になる。芸術文化活動は、多岐にわたる活動分野があり、日々新しい様々なものが創造されていく活動である。その過程においては、公共性から逸脱したり、世間一般にアピールするほど広範な活動とはならないこともあることを認識しなければならない。

一人の想いや勢いで始めたものが、やがて多くの人々の共感を呼び、それに呼応した人々が全国から集まり、全国区の大イベントにまで育ったものもある。

このように、公共性と独創性には、時に相容れないものがあることも想定した上で、芸術文化事業に臨むことも、時には必要である。

### ② 公共性を確保した町の支援

地域再生、町づくりなどが叫ばれて久しい。行政は、住民が芸術文化活動に気軽にふれあうことができる環境を整備するため、そこに「公共性」「公益性」を意識しながら取組んでいかざるを得ない。今後、様々な企画をもって、いつも街角に芸術文化の息吹や熱が肌で感じ取れるような取組みを模索し、町は芸術文化が公共の事業として必要であると、高い意識を持って取り組んでいく必要がある。

芸術文化がもたらす「生きる力」「ワクワクドキドキ」をより一層向上させ、芸術文化活動の今後をいかに発展させていくべきか、その方向性を導き出すためにこれまで考察を続けてきた。

町が取り組む芸術文化活動は、誰もが自由にいつでも触れられる活動となるように、今回の懇談会やPTのような意見集約ができる場で検討していくことが重要と考える。「ローカルカフェ」のような「ゆるやかな合議体」による意見の集約を定期的に継続して実施し、住民の声を芸術文化の発展に活かす機会を設け、研究討議を積み重ねていくことが重要である。

ローカルカフェの実施は、芸術文化について住民同士が語らう場としては非常に有効な手段であったと思う。話し合いは文化的で創造的、且つ、ゆとりや遊び心に溢れていた。そこには確かに芸術文化的な公共性があったと感じている。あの話し合いのような空気感を、今後の町の芸術文化活動が、意識せずとも自然とまとうことができるように、今後も支援の在り方を常に検討していく必要がある。

このような住民との話し合いによる地道な意見の蓄積と研究討議を継続させ、それがやがて、町の芸術文化の必要性や方向性を示し、住民発議による三芳町の芸術文化活動となり、公共財<sup>vi</sup>としての芸術文化として認知されることになるのではないかと考える。

## 5 まとめに代えて

「生きる力を育む芸術文化」をキャッチフレーズに2年間にわたって、住民（芸術文化懇談会）と職員（政策研究所「芸術文化」PT）が一体となって進めてきた、芸術文化のまちづくりの取組みの第一段階は、町への提言書をもって終わりを迎える。懇談会や芸術文化PTの打ち合わせ及び発表会・シンポジウム・研修会等を合わせると、40日を超える取組みとなった。

当初、三芳町の芸術文化活動の実態を調べることで、三芳町には多様で多くの芸術文化活動が進められていることに驚きさえ覚えた。歴史を遡ってみると、江戸時代後期からお囃子が伝わり、盛衰を繰り返しながらも現代までしっかりと継承されていることがわかった。また、文化協会などをはじめとした団体の活動や、昭和40年頃から始まった公民館や学校、保育所や児童館などの町の施設の建設・開館、平成14年の文化会館のオープンを契機として、いっそう住民と行政が相互に関わる芸術文化活動が進められていることも特徴といえる。

本提言書にも記したが、芸術文化活動の役割の一つは、芸術文化活動そのもの（ワクワク・ドキドキ感、癒し、励まし等）が有するもの。二つ目は、人間関係や地域社会の関係（コミュニティ）の維持、形成であると考えられる。三芳町においては、各行政区や学校区毎のきめ細かい取組みやつながり、みよしまつりや町民体育祭・文化祭などの全町民対象の取組みが行われていることなどをみても、コミュニティの維持・形成は町ぐるみでも進行している。しかし、日本各地で、地域コミュニティ維持の危機が叫ばれる今日、体育祭などの参加者の減少や、行政区・自治会等への加入の現状などに見られるように、三芳町にも徐々に危機は訪れている。

芸術文化活動だけでなく、スポーツ活動などを含めた文化活動は、そのものの価値に留まらず、人間らしく生きていく力を秘めた人間固有の活動である。人と人が触れ合い、関係し合い、認め合い、育ち合い、豊かな社会を形成することを、少しずつ、着実に進めることが求められているはずである。憎しみや戦いが続く世界で、文化活動は人類史と共に淡々と、そして脈々と進み、私たち人類の共通の財産となってきた。このことを私たちは忘れてはならない。

十分とは言えないまでも、芸術文化活動への提言書を町に提出することで、今後も継続して町が芸術文化活動を推進していくことが、三芳町に関わるすべての人々の未来への展望を示していくことに他ならない。時代や世代が変わろうとも、芸術文化活動の推進をまちづくりの根幹の一つに据え続け、住民を主体として様々な施策を展開することを止めてはならない。そのために必要なもののひとつとして、条例等の制定が挙げられる。これについては決してあせらずに、住民が主人公となりながら、これまで、そしてこれからの芸術文化の活動を検証しながら作り上げることが肝要であることを記しておく。

---

<sup>i</sup> 当時活躍していた西多摩郡秋留村二宮（現あきる野市）の六代目薩摩和歌太夫の娘。そのころ前田家は陰陽師と神楽を業としており、神楽を通じて多摩地方と往来があった。それが機縁で人形芝居が伝えられたと言われている。（三芳町教育史編さん委員会（1985）『三芳町教育史』三芳町）

<sup>ii</sup> 昭和 40（1965）年厚生省策定、平成 2（1990）年・平成 12（2000）年・平成 20（2008）年改訂

<sup>iii</sup> 昭和 31（1956）年文部省作成、昭和 39（1964）年・平成元（1989）年。平成 10（1998）年改訂

<sup>iv</sup> 平成 22 年度 劇場・音楽堂の活動状況に関する調査報告書（平成 23 年 3 月）より 編集発行 社団法人全国公立文化施設協会

<sup>v</sup> 本法律は、平成 13（2001）年に制定された、文化・芸術の振興に関する基本的な理念・施策について定めた法律。国・地方自治体は、文化芸術活動を行う者の自主性を十分に尊重しながら、文化芸術の振興に関する施策を実施する責務を有するとしている。また、第 25 条に「(劇場、音楽堂等の充実) 国は、劇場、音楽堂等の充実を図るため、これらの施設に関し、自らの設置等に係る施設の整備、公演等への支援、芸術家等の配置等への支援、情報の提供その他の必要な施策を講ずるものとする。」とある。

<sup>vi</sup> 各個人が共同で消費し、対価を支払わない人を排除できず、ある人の消費によって他の人の消費が妨げられない財・サービス。通常、国など公共部門によって提供される公園・一般道路・消防・警察など。（『デジタル大辞泉』小学館・監修：松村明・編集委員：池上秋彦、金田弘、杉崎一雄、鈴木丹士郎、中嶋尚、林巨樹、飛田良文・編集協力：曾根脩）

### 三芳町芸術文化懇談会委員（五十音順）

柿崎	明美	リコーダーサークル	ピッコリーナ
楠瀬	寿賀子	津田ホール	プロデューサー〔会長〕
倉園	眞記	コピスみよし（指定管理者:㈱ケイミックス）	日本演出者協会会員
小玉	里加	藤久保中学校	音楽教諭〔平成25年度〕
小林	一恵		バイオリン奏者
嶋垣	ナオミ	竹間沢マンスリースクウェア	
菅原	佳奈	藤久保小学校	音楽教諭〔平成26年度〕
梶田	吉久	三芳町文化協会	
鈴木	修一	三芳町郷土芸能保存協議会	会長
古川	慶子	竹間沢小学校	校長
牧瀬	稔	一般財団法人地域開発研究所	研究部 主任研究員〔職務代理〕

### 政策研究所「芸術文化」プロジェクトチーム研究員

伊勢亀	邦雄	教育委員会	生涯学習課 課長〔兼三芳町芸術文化懇談会委員〕
前田	早苗	自治安心課	自治協働担当 主幹
小平	幸治	生涯学習課	生涯学習担当〔リーダー〕
神田	道元	こども支援課	北永井児童館
三田村	宗剛	コピスみよし	事業担当（指定管理者:㈱ケイミックス）
八田	宏治	財務課	電算統計担当
小林	美智子	政策推進室	政策推進担当〔兼事務局〔平成26年度〕〕
山崎	陽介	政策推進室	政策推進担当〔兼事務局〔平成25年度〕〕
丸野	寿子	政策推進室	政策推進担当〔兼事務局〕

○三芳町芸術文化懇談会設置要綱

平成25年6月14日

告示第149-2号

(設置)

第1条 三芳町の芸術文化の振興について多様な分野から専門的な助言を得るため、三芳町芸術文化懇談会（以下「懇談会」という。）を設置する。

(任務)

第2条 懇談会は、次に掲げる事項を審議し、意見等を提言するものとする。

- (1) 芸術文化の振興に関すること。
- (2) 芸術文化の創造と新たな発信に関すること。
- (3) その他必要な事項に関すること。

(組織)

第3条 懇談会は、委員11人以内をもって組織し、芸術文化等について優れた識見を有する者の内から町長が委嘱する。

- 2 委員の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。
- 3 委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(会長)

第4条 懇談会に、会長を置き、委員の互選によりこれを定める。

- 2 会長は、会務を総理し、懇談会を代表する。
- 3 会長に事故があるときは、あらかじめその指名する委員が、その職務を代理する。

(会議)

第5条 懇談会の会議は、必要に応じて会長が招集し、会長が議長となる。

- 2 会長は、必要があると認めるときは、懇談会に委員以外の者の出席を求め、意見及び説明を聴くことができる。

(庶務)

第6条 懇談会の庶務は、政策推進室において処理する。

(委任)

第7条 この要綱に定めるもののほか、懇談会に関し必要な事項は、会長が別に定める。

附 則

この告示は、公布の日から施行する。



芸術文化懇談会

政策研究所「芸術文化」プロジェクトチーム

2年間の活動をふり返って

2年間の懇談会及びプロジェクトチームの活動を経た

委員及び研究員の感想を掲載します（順不同）。

---

## 楠瀬 寿賀子 委員

欧米において芸術文化がその都市の価値を高めている例はよく見られますが、日本でも地域活性のエネルギー源としての価値に着目した自治体が生まれ、その成果が少しずつあらわれはじめています。とくに小規模の市町村では機動力のあるアイデアで文化芸術のまちを目指すところも多く、いま三芳町が芸術文化懇談会を立ち上げ、この提言書をまとめたことは大きな意味をもつでしょう。

「大切なことは目に見えないんだよ」。

サン＝テグジュペリの「星の王子さま」の中で、キツネが王子さまに言う言葉です。

三芳町芸術文化懇談会は、その「目に見えない大切なこと」について考えた2年間でした。

「芸術文化」とはいったい何を指すのか、それがどのような価値をもつのか、住民の代表である委員のひとりひとりが、それぞれ自らが関わっている芸術文化活動の意味を捉え直し、懇談会の中でお互いに意義や課題を明らかにしていくことで、三芳には祭りや伝統芸能などの文化的な資源や地域に根ざしたさまざまな芸術活動が存在していることがあらためての共通認識となりました。

1年という時の流れについて、おとなは子どもが感じるよりもずっと早く行き過ぎてしまうと感じるでしょう。「ああ、またひとつ年をとってしまった」、というように…。それはなぜか、というと、子どものころは見るもの聴くもの、何もかもが初めての体験をひとつひとつ新鮮に感じるが、おとなにとっては初めてのことが少なくなっていくから、だそうです。

見るもの聴くものが初めての子どもたちは、それを見て聴いているだけでなく、もつと心の奥で体験しています。三芳町で10年以上もつづけられているアウトリーチでの子どもたちのようすや、街なかでも行われているロビーコンサートで演奏する中学生の吹奏楽を見て聴いていたおとなたちの心の奥にも何かが残ったことはまちがいありません。

子どもに感じた「ワクワク、ドキドキ」した気持ちは、これからの子どもたちにも感じてほしいことはもちろんですが、その子どもたちの姿をとおして、おとなたちももう一度、あの「ドキドキ、ワクワク」を日常の中に感じていく、それこそが住民の方々の「生きる力を育む」ばかりでなく、三芳そのものの「生きる力」にもつながっていくのではないかと考えました。

なによりも、この懇談会をとおして、住民と役場の方々とが、芸術文化はなぜ必要なのか、というところからともに問い直し、「生きる力を育む」というテーマを核心に据えてともに考えていったことそのものがとても重要なことでした。この種まきの第一歩から豊かに花開き果実を实らせるその先を未来の三芳の子どもたちが受け継いでいくために、三芳のすべての人がその人生の中でさまざまな形で芸術文化を享受する、そのための考え方や仕組みを2年間話し合っただけでまとめたものが、この提言書です。

「目に見えない大切なこと」については、この先もより多くの住民のひとりひとりが自分たちのこととして関心を持ち、考え、意見を交わしていただきましょう。三芳が芸術文化の、そして芸術文化で魅力あふれるまちになるために。

---

突然ですが、クイズです。次の【 】内を埋めてください。

[問1]2011年の文化庁における芸術文化関係の予算は【 】億円である。

[問2]2010年7月における地方自治体の芸術文化関係の条例は【 】条例ある。

[問3]日常生活における芸術文化の体験や活動の必要性を感じている国民は【 】%いる。

回答です。問1は「1,031」億円になります。国は芸術文化関係の予算を一貫して増やしてきました。リーマンショック後の厳しい財政状況においても、少しずつ予算を増額しています。それだけ国は芸術文化を重要視していることが理解できます。なお、芸術文化関係の法律は9法律あります。それらの法律の基本となるのは、2001年（平成13年）に制定された「文化芸術振興基本法」になります。

問2は「99」条例となります。地方自治体の多くが平成に入ってから芸術文化関係の条例を制定しています。その中で先進的な事例は秋田市になります。秋田市は1983年（昭和58年）に「秋田市文化振興条例」を制定しています。

問3は、内閣府「文化に関する世論調査」（2009年）の数字です。それは「88.4」%になります（「非常に大切である」+「ある程度大切である」を加えた数字）。この数字も、同調査を実施するごとに拡大しています。

様々な調査や実態から、芸術文化は、私たちの日常生活に必要不可欠な存在となりつつあることが理解できます。特に成熟社会を歩んでいる日本においては、芸術文化は日常生活を彩りあざやかにしてくれる一つの大切な要素となりつつあります。

三芳町芸術文化懇談会は、三芳町における芸術文化を様々な側面から検討してきました。私以外は芸術文化に造詣の深い方ばかりでして、芸術文化に対する熱い思いが伝わってきました（私は政策学という立場から「冷」静に意見交換を眺めていました。ちなみに私は極度の「冷」え症です）。

同懇談会の意見交換の経緯を経て、委員一人ひとりの結論は異なると思います。その中で私が得た結論は、芸術文化には「つなげる」力があるということです。人と人をつなげたり、三芳町で生活する住民と三芳町役場をつなげたりします。また、住民と企業の橋渡しにもなると思います。

そのつなげることのできる芸術文化を活用して、三芳町のまちづくりを三芳町に關係するそれぞれの主体者をつなげ、全員で考えていくことに一つの要点があると理解しました。そのように考えると、芸術文化は手段であり、目的ではないということです。手段として芸術文化を捉えることが、結果として芸術文化が多方面に発展できるとも実感しました。

三芳町長のマニフェスト「林いさお未来創造31の宣言」には、「宣言⑥（仮）芸術文化のまちづくり条例の制定を目指します」と明記されています。芸術文化を目的と捉えるのではなく、三芳町の未来を創造していく一つの手段と捉えた条例が結実するとういいなあと思います。

---

---

## 倉園 眞記 委員

弊社が指定管理者として管理・運営をさせて頂いているコピスみよし（三芳町文化会館）の担当者としてホールの役割や三芳町の特徴や声を模索していた頃、【三芳町芸術文化懇談会】へのお誘いを受けました。

与えられた懇談会という場は、楠瀬会長をはじめとする背景も考えも様々でユニークな委員が集まった、自由と不自由さが混在した不思議な空間でした。2か年という時間をかけて、多角的に三芳町の文化芸術について意見交換ができたことで、思いがけない楽しい発見が沢山ありました。そんな中から生まれ、キーワードとなった『熱、ワクワク・ドキドキ、そして生きる力』。身近だけれど、いつまでも色あせない魅力的な言葉たちです。

私にとっての「ワクワク・ドキドキとは？」と、考えてみました。私は舞台活動を通じて仲間を得て、劇場によって社会とつながることができた人間です。命を救われたと言っても過言ではないでしょう。長い時間をかけて完成度を高めてきた音楽やダンスや演劇には、沢山の『ワクワク・ドキドキ』が詰まっていて、それらは人から人へ伝わっていきます。

その熱の伝播は、劇場の中だけではなく街中でも起こります。

学生の頃、ある街を泣きながら歩いていると、向こうから鼻歌を歌いながら上機嫌でやってくるおばあさんがいます。そして、私にこういうのです。

『ほら、おひさまがあなたに微笑んでいるわよ。』

そこには、もううつむいている、泣きべその私はいませんでした。

さて、三芳町の皆さんは、どんな歌を唄い、どんな言葉をかけるのでしょうか。

三芳町も素敵な劇場空間となりますように。

---

---

## 梶田 吉久 委員

「文化協会」から、一委員として参加致しました。

当初は立場上、文化団体等の組織に関する懇談会と思い込み、安易な気持ちでおりました。

最初の会議で意見を求められたとき、そのような関連の発言をしました。しかし会議を重ねる毎に、私の考えが浅はかであったことに気付きました。

「何のために、町が芸術文化活動を推進するのか」・・・

町の「芸術文化政策」の1つとして、「芸術文化のまちづくり」、芸術文化レベルの底上げをするために、子ども達にいかに関係する芸術文化に触れるチャンスを与えるのか、・・・興味をもたせ、将来心豊かな人間に育てていくのか、老若男女が芸術文化に興味を持ち、拘わってくれるのか、住民自らが多様な形で拘わり交流し合えるためにはどうしたらよいのか、そのための「芸術文化懇談会」がスタートしたことに、改めてこの重要性を認識させられました。

「生きる力を育む芸術文化」をキャッチフレーズに、一委員として微力ながら「3本の柱」を示し、本提言書が出来たことに、各委員さんとPTの方々に感謝致します。

そして、これらのサークルや個人の芸術文化活動が活発になり、又、伝統芸能の継続と発展と、併せて文化協会の組織率も高まり、住民参加の充実した「町民文化祭」が開催できるようになり、町の主要催事として、広く住民に期待される事業と成ることを願っております。

---

## 鈴木 修一 委員

ワクワク・ドキドキ、演・観・両者が共有するのが理想。

演じる者は、ワクワク・ドキドキをその時々感じられることと思う。

観る方々をワクワク・ドキドキさせるのは、かなりむずかしいと思う。

演・観 共にワクワク・ドキドキを共有できるのは、演が児童・生徒、観が父母のときかな・・・

---



---

## 嶋垣 ナオミ 委員

2年にわたり、素人の私が芸術文化と町という途方もなく大きなテーマに沿って委員の皆様とご一緒に話し合う過程で、いっそう新たな興味が芽生えた。小学校でのアウトリーチや、幅広い年代間で気軽に話し合うローカルカフェに初めて参加したほか、伝統芸能とサークルのコラボレーションという意欲的な取り組みも鑑賞した。

若い音楽家たちと児童との熱心で率直な交流に間近で接し、町への提案やこれらについて、自分の言葉で真摯に語る生徒さん方に出会えて、心にぽっと灯が点る思いだった。

今後、若々しいエネルギーと、様々な分野で経験を積んだ世代とが智慧を出し合い、一つになって取り組める機会があれば、きっと何か新しい力が生まれてくるのではないだろうかと思わずにはいられない。

ほぼスタート時から長年携わっている竹間沢公民館のマンスリースクウェアにおいても、原点である地域に根ざした上で、また異なる視点から仲間の皆様とともに取り組んでいきたいと願っている。

---

## 小林 一恵 委員

委員として懇談会に参加させていただき、三芳町がこれまで取り組んできた様々な芸術文化活動について知ることができました。

そして町が今力を注いでいるアウトリーチ事業やロビーコンサート、またコピスでの楽しい企画のコンサートにもいくつか足を運んでみましたが、どれも質の高い素晴らしいものでした。こういう体験こそ子ども達に必要なものだと思います。

「ローカルカフェ」も幅広い年代の人達と自由に意見交換ができ、有意義で楽しい企画でした。

2年間貴重な経験をさせていただきました。

町への提言が今後どんな形で反映されていくのか楽しみです

会長さんをはじめPTの方々のご尽力に心から感謝申し上げます。

---

---

## 柿崎 明美 委員

芸術文化懇談会・・・はたして素人の私が役に立てるのか？どんな話し合いをするのか？と、緊張しながらの参加でした。役に立てたかはさておき、私にとってとても有意義な会でした。漠然とした、あまりにも大きな課題に、どう方向づけていくのか手探り状態の中、様々な立場や環境からの意見、又、専門的なお話も聞いていく話合いの中で、『ワクワク、ドキドキ』という素敵なキーワードが生まれたことはとても大きな一歩だと思います。

又、様々な企画に参加した中で特に印象に残っているのはローカルカフェでの子どもたちの思いです。子どもたちは大人が思っている以上に『ワクワク、ドキドキ』したいんだ！大人がその芽を大人の事情で枯らしてはいけない！と痛感しました。

まだまだ始めの一歩ではありますが、出来上がったこの提言書が基になって、近い将来 38000 人が総『ワクワク、ドキドキ』できるようになることを楽しみに、私もまずはこの貴重な 2 年間で自分が学んだこと、考えたこと、感じたことを私なりの方法で身近なところから伝えて『ワクワクドキドキ』の輪を広げていく一端を担っていきたいと思います。

---

---

## 古川 慶子 委員

三芳町芸術文化懇談会の委員として会議等に参加させていただき、皆様のお考えを伺えたことはよかったと思います。とりわけ、「ローカルカフェ」における住民の方々のお話は印象深く心に残っています。

「ローカルカフェ」は、芸術文化との関わりで、現在実践していることのよさを継承することと、よりよい三芳町を創造することの大切さをそれぞれの立場で考え、交流させていただいた有意義なひとときでした。よりよい町づくりを真剣に考えていらっしゃる住民の皆さまの熱い思いに感動しました。

皆様のお話を伺い、共感するとともに、さらに地域の方々と連携をして教育活動を推進したいという考えを深めることができました。ありがとうございました。

---

## 菅原 佳奈 委員

昨年度の藤久保中学校小玉教諭から引き継ぎ、1年間、芸術文化懇談会の委員として参加させていただきました。校務と重なり、ほんのわずかな回数しか参加できず、大変申し訳ありませんでした。

7年前、他市からこの三芳町に赴任し、最初に驚いたのは小学校の運動会で鼓笛隊マーチングドリルの取り組みがあることでした。5校の小学校がそれぞれの学校の特色を生かして、長い時間をかけて一生懸命練習し、心を一つにして演奏する姿には本当に感動します。鼓笛を通して心も身体も大きく成長します。三芳町の子供たちは鼓笛だけでなく、音楽への情熱に溢れ、まっすぐに音楽に向き合い、精一杯演奏することができます。そんな子供たちは日常の生活の中でも音楽と関わりたい、そして生涯音楽と関わっていきたいと思って、地域の中で音楽とふれ合える場所を求めています。この「芸術文化プロジェクト」はまさに子供たちの思いに応じて頂けるものであると思います。素晴らしい三芳町の子供たちと、町の皆さまが地域の中で音楽を通し心を豊かにすることができますように・・・。

---

---

## 伊勢亀 邦雄 委員 兼 研究員

昭和 58 年 5 月、町で二つ目の公民館である藤久保公民館の開館と共に三芳町の職員となった。早速、開館記念事業「車人形公演『夕鶴』」が新しいホールで行われ、先輩職員と共に小さな調整室に入ってぶっつけ本番で、旧式のピンスポットライトを舞台に照らしていた。それから 30 数年間、文化会館コピスみよしの立ち上げや、竹間沢公民館や今年 5 月にオープンする新中央公民館の開館に携わってきた。異動で文化会館を後にしたときは、道半ばゆえの挫折感と脱力感が体全体を覆い、その後、芸術文化活動は私的に取組むことと心に決めていた。

因果応報、平成 23 年途中から指定管理となった文化会館・体育施設の担当となってしまった。今度は、自らが事業や運営を行うのではなく、監督や指導を行うんだと。そんな柄ではないことは自ずとわかっている。指定管理のみなさんと話を重ねていくうちに、運営や事業を一緒に考えていくこととした。誰にとっての芸術文化活動、誰にとってのスポーツ・レクリエーション活動なのか？

芸術文化事業ではなく、芸術文化そのものや、私の苦手な「芸術文化活動でどうするか」をこの二年間で考えていくこととなった。芸術文化活動をツールとして使うことにはためらいがある。演劇を観て心を揺らされたり、演奏を聴いて涙したり、それだけでいいはず…ではないことも薄々は感じていた。そのことを懇談会や PT のみなさんと議論ができたことは幸い。少し糸がほぐれた気がする。

ある委員さん、毎回違う帽子をかぶってくる。とても上等で素敵である。それだけで少し気分が変わると、私は思う。長い間人類が築いてきた芸術文化活動はこのことかもしれない。アーティスティック（Artistic・趣のある、芸術的な）な気分や過ごし方・生き方を少しでもできればいいなあ〜と思う。そして周りにいる人たちと一緒に。まだまだスタートラインである。

---

---

## 小平 幸治 研究員

林檎を描いたのに、「お子さまランチの旗？」と言われて以来、描くのが嫌いになった。

ギターを習っても、指が硬くなる前にやめてしまった。

要するに、歌心も絵心も、センスも根気もないのだ。そんな私が、芸術文化PTの活動を2年間することになってしまった。芸術文化の素養もセンスも無いが、運だけはある。PTのメンバーには恵まれた。結果的にはうまく乗り切れてしまった。

三芳町の芸術文化の政策提言というけれど、町の芸術文化活動の根幹は町にあるのではない。それぞれの人の活動に在るものだ。提言書を上程した今も、おこがましいのではないか？との想いが多少ある。

住民に失礼のないよう、議論は精一杯やった。住民のためになること、芸術文化のためになることを、PTメンバーと考えた。学習会も開催した。懇談会やローカルカフェで住民とも意見を交わした。センスもない私と前述したが、ローカルカフェに、自分が声をかけた中学生が来て意見することを楽しんでくれたことは、少し自慢してもいいと思っている。

町の芸術文化の指針となる、煌びやかな文章に満ちた、素晴らしい提言書、とはいえないかもしれない。しかしそれでいいと思う、芸術文化は多種多様なのだから。

町の芸術文化を想う人たちの、生々しい想いは込められたと思うから、今はこれで良いと思う。

---



---

## 前田 早苗 研究員

この2年間「芸術文化」という言葉がいつも頭の片隅にありました。イメージでは、なんとなくわかっていたつもりでしたが、言葉で表現することは大変難しいことでした。そして、この言葉をキーワードに懇談会やプロジェクトチームの皆様と話し合いをすすめ、現場に出向き鑑賞し、体験した時間は、私にとって貴重なものとなりました。特に「ローカルカフェ」では、性別を問わず、幅広い年代の皆様から素晴らしい、ご意見を聞くことができたことは、今後の仕事につながる大切な時間でした。

幼い頃から郷土芸能が日常となった環境で育ってきた私には、続ける苦悩がありました。芸術文化との関係性など考える余裕もなく、皆様からの温かい拍手をいただくことで越えてきました。このプロジェクトチームでの研究により、地域に根付く郷土芸能もワクワク・ドキドキの芸術文化の一助を担うことができるとわかったことで、この先は違った角度から取り組み、楽しく続けていくことができそうな気がします。

ワクワク・ドキドキが少しずつ、ひろがって行くことを期待するとともに、この芸術文化の研究に携わった全ての皆様に感謝いたします。大変なこともありましたが、とても充実した楽しい時間をありがとうございました。

---

## 神田 道元 研究員

「芸術文化でまちづくり」は、芸術文化という高尚なものに縁がなく、まちづくりとは関係のない部署で働いている私にとって、掴みどころのないテーマでした。果たして自分に務まるのだろうかという不安の中、入塾式の日を迎えたのを覚えています。

プロジェクトチーム（以下PT）のメンバーは「芸術文化」や「まちづくり」に関わる人達ばかりで、ますます肩身の狭い思いになりましたが、自分の意見を安心して話せる雰囲気があったので、わからないならわからないなりの疑問や的外れな意見でも受け止めてもらえることができました。議論を重ねていき中間報告書を経て提言書の形が出来上がっていくとともに、私自身の「芸術文化」や「まちづくり」に対する理解も深まり、メンバーとの議論も活発になっていき、やりがいを感じるようになりました。

その中で感じた難しさは、議論の先にある明確な目標設定と、この議論は誰の為のものなのか、ということメンバー全員が共通認識することです。日々の業務で多忙な中貴重な時間を割いて集まっているのに、私自身が話についていけないことを原因に話を戻してしまうこともあり、もっと早いうちに意見を出していれば良かったと反省しました。日々の業務でも同僚との話し合いではこの反省を活かしていきたいと思えます。

「芸術文化でまちづくり」という大きなテーマに向かって他の部署の人たちと議論を重ねてきた2年間はとても有意義な時間でした。PTメンバーはもちろん、私が現場を離れている間にフォローしてくれた同僚に、感謝の気持ちでいっぱいです。

---

---

## 八田 宏治 研究員

2年間、文化芸術プロジェクトチームに携わらせていただいた。

私自身も楽器演奏などを趣味にするなかで、文化芸術という言葉がこれほど考えたことはなかった。文化芸術とは何なのか。これまで当たり前のようにやってきたことが、誰かに説明するとなるとこれほど難しいこととは。そして、多くの人の意見を聞く中で、その意味もあり方も、ひとつではないことを知った。人が一人一人違うように、そこに生まれる“文化芸術”もそれぞれの魂を持っている。このプロジェクトは、その魂を探る旅でもあったように思う。

最後に、チーム員のみなさま、懇談会のみなさま、かかわっていただいたすべての方々に、感謝を申し上げたい。

---

## 三田村 宗剛 研究員

「“芸術文化のまちづくり”を進めるためにプロジェクトチーム（PT）に参加してほしい」という声がかかったのは、私がコピスみよしに着任してまだ半年も経たない頃であった。PTのメンバーは私以外は皆役場職員。果たして自分の経験や知識が政策提言という分野においてどこまで活かせるのか正直不安だったが、これもいい経験として参加させていただくことになった。

「芸術文化は心を豊かにする活動である」とはよく聞くものの、なぜ心が豊かになるのか、そもそも豊かさとは何か、はたまた芸術文化とはなんぞやという素朴な疑問には、芸術文化を嗜み芸術文化を仕事にしている私でも明文化が難しい。一言で言うならば、「良いものは良い」としか表現できないのだ。PTでも“見えない山”を乗り越えんとすべく意見を出し合うが、何せ見えないのだから麓にさえたどり着けない。しかし、それぞれが体験談や立場から真剣に見えない山のことを考え出し、ときには住民の皆様の貴重なご意見もいただいて、最終的にこのような提言書を作成することができた。芸術文化という見えない山を乗り越えたとは未だ言えないが、少なくとも霧は晴れた。

PT、懇談会、ローカルカフェはあたかもワークショップのようであった。それも、全員が講師、全員が受講生という特殊なものだ。皆様の意見を参考に、コピスでは平行して多種多様の芸術文化事業を展開することができたし、コピスが住民と町にとってどんな場所なのか、深く知ることができた。皆様には感謝の念しかない。

芸術文化活動において受け手と出し手が共に心揺さぶることができる最も重要な要素は、エキサイティング（興奮）とアメージング（驚き）である。すなわち、「ワクワク、ドキドキ」の一言に尽きるのである。

---

---

## 小林 美智子 研究員

私がこの芸術文化プロジェクトチームに携わったのは他でもない、人事異動によるものからで、まるで線路が引かれて決まっていたかのように上司からの「お願いね」の一言でした。「なぜ私が？」の疑問が消えぬまま、懇談会に参加させていただきました。

懇談委員会は様々な分野の専門家で構成されており、町自体の発展とともに芸術文化について真剣に取り組まれていて、町としてもこのご縁は大事にしなければいけないと思いました。次に感心したのは、秋に開催されたローカルカフェで、当日出された様々な人からの様々な意見。特に子どもたちからの「本物を求める強い気持ち」にはこちらの心が揺らがないわけがありません。

本当に勉強させられた一年であり、様々な方から支えられ、愛されている町であると改めて確信したのと、立上げ当初から携われなかったのが残念でならないと感じました。が、しかし「芸術文化でまちづくり」この壮大な構想はまだまだ始まったばかりでもあります。この提言書がどのような形で町に活かされていくのかまさに「ワクワク・ドキドキ」です。

---

## 丸野 寿子 研究員

これまで、事務局も兼ねていくつもの政策研究所のテーマに関わってきましたが、私にとって最も難解なテーマはこの芸術文化でした。懇談会の委員の皆さまはもちろんのこと、研究員の中でも芸術文化から最も遠い存在だったことは間違いありません。

それでも、小林先生にお越しいただいた学習会やローカルカフェ、様々な視察、研修、PT 及び懇談会の会議等を通して、芸術文化そのものの意義や意味を考え、住民の皆さんの想いを肌で感じ、知ることができたのは、本当に良い経験になったと、この提言書を手にして改めて感じています。

事務局としても力不足な部分が多々あり、委員の皆さま、研究員の皆さまをはじめ、多くの方にご面倒、ご迷惑をおかけいたしました。この場を借りてお詫びするとともに、心より感謝申し上げます。

---



## 資料編 目次

資料1 芸術文化懇談会・政策研究所「芸術文化」PTの活動記録 ..... 1

資料2 芸術文化施策への具体的なアイデア ..... 2

資料3 ローカルカフェで出された意見 ..... 5



平成25年

- 6月12日 PT会議①
- 7月9日 PT会議②
- 7月24日 芸術文化懇談会①
- 8月6日 PT会議③
- 9月4日～6日  
ステージラボ研修参加
- 9月5日～6日  
文化政策セミナー参加
- 9月18日 PT会議④
- 9月25日 芸術文化懇談会②
- 10月2日 PT会議⑤
- 10月29日 PT会議⑥
- 11月21日 学習会打合せ
- 12月4日  
学習会・芸術文化懇談会③
- 12月11日 PT会議⑦

平成27年

- 1月14日 PT会議⑫
- 1月29日 PT会議⑬
- 2月5日 PT会議⑭
- 2月24日 芸術文化懇談会⑨
- 2月26日 PT会議⑮
- 3月18日 PT会議⑯
- 3月28日  
最終発表・  
芸術文化シンポジウム

平成26年

- 1月15日 PT会議⑧
- 1月21日 芸術文化懇談会④
- 2月5日 PT会議⑨
- 2月12日～14日  
小学校アウトリーチ活動視察
- 2月18日 PT会議⑩
- 2月25日 芸術文化懇談会⑤
- 3月19日 PT会議⑪
- 3月23日 中間報告
- 4月8日 PT会議⑫
- 5月14日 PT会議⑬
- 6月17日 芸術文化懇談会⑥
- 6月24日 PT会議⑭
- 7月1日 PT会議⑮
- 7月24日 芸術文化懇談会⑦
- 8月12日 PT会議⑯
- 9月10日 PT会議⑰
- 9月28日  
ローカルカフェの実施
- 10月9日 PT会議⑱
- 10月28日 PT会議⑲
- 11月20日 PT会議⑳
- 12月1日 芸術文化懇談会⑧
- 12月2日 PT会議㉑
- 12月3日～5日  
小学校アウトリーチ活動視察

芸術文化懇談会やPTで出た3本の柱（提言書「4.2」）や町の芸術文化施策について、アイデアをまとめました。このアイデアは、ワールドカフェで出された意見等が反映されたものになっています。

## 全般

コピス周辺にフードコートのあるショッピングセンター等を誘致し、常に人が集まる場所にするなど、「芸術文化の発展」と「まちづくり」を**総合的に考える**ことも必要。

<三芳町の良さは  
今も残る自然にあり>

武蔵野の面影を今も留める貴重な三芳町の**自然を活かして**、文化活動と結びつけることで、三芳町らしさ、三芳町ならではの催しを打ち出す。

例)  
秋の林での落ち葉掃き、芋掘り



焼き芋大会、写生大会など



林内での演奏会、あるいはコピスに移動しての本格的なステージ鑑賞、公演、講演会など

（この逆の順番も可能）

## 三芳町を「こんにちは」の街にする

- ①みよし・こんにちは体操をつくる  
ダンサーや音楽家が町民の方々とともにワークショップを行い、二人一組で行なう「こんにちは体操」をつくる。
- ②「こんにちは」からはじまる街角アート体験  
街の中に音楽や演劇や写真やダンスなど、さまざまな「こんにちは」を設置して、オリエンテーションのように集める。  
最終的にはこれを「こんにちは体操」に結びつけることも可能。  
→「こんにちは」の題材には、文化協会、マンスリー、ピッコリーナなど、地域で活動されている方々を活用。  
例) ・「愛のあいさつ」を街角で演奏。  
・出会った人と「こんにちは」の顔の写真をお互いに撮りあう。  
・街の中で「こんにちは」の音を採集。  
・「こんにちは」をテーマにした書や生け花、絵画など

丸一日かけて、自然に接し、自然と一体化した上で、芸術文化活動も盛り込んだ**贅沢な企画**を立てる。

…その日の移動には、ライフバスやその他バス会社の協力を得て、多数の町民や町の外からの人々の足とすることが肝心。  
…誰でも参加できる気軽さと、安価であることが鍵。

## 3本の柱

地域・住民と  
事業目的との  
関連性を意識する

町の協賛事業を増やし、  
**会場やボランティア**  
**等の支援**をする。

例) マンスリー  
映画会  
講演会  
美術展  
コンサート  
料理教室 等

ボランティアでボラ連があるように、**アーティスト連**があると良い。

…芸術文化のサークルが横のつながりをもてるような機会をつくる。  
…個々の活動でも協力し合えるところは協力して周りを巻き込む。  
→文化協会かコピスが中心に  
なれないか？

**アーティストバンク**、  
芸術文化ボランティア人材バンクを創設する。

…事務局を設置  
…部活動の指導者、  
授業のゲストティーチャーに  
…講座の開講  
例) 小学生の為の合唱講座、  
管楽器や弦楽器のアンサンブル講座等

**アート井戸端会議**を開催し、  
プロ・アマチュアを問わず、  
地元で芸術文化活動に関わる人  
たちで実施する。

テーマ例)  
・三芳町の芸術文化の発展  
・町の課題を解決するための芸術文化企画の提案  
・互いの連携などを強める提案  
・情報交換  
※芸術文化コーディネーターの  
人材発掘を意識する。

**発表（演奏）の場**  
を提供する。

例) コピスの風コンサートの  
復活 等

芸術文化の分野に  
**ジュニアボランティア**  
を拡大

例)  
・学生プロジェクト  
…中高生が音楽家とともに  
企画を考え、コピスで  
コンサートを開催  
・高齢者施設でアウトリーチ  
など

**路上パフォーマンス登録許可制**(東京都)

…良い点を取り入れ、三芳町での公演活動に多少でも関心を持つ  
様々な分野の方々に事前登録してもらい、アーティスト、スタッフ両  
面での幅広い人材リストを作り上げていく。  
…出演アーティストの力量に関しては、デモテープなどによっても最終  
的に企画段階で絞り込んでいけるため、許可制ではなく、誰でも気  
軽に登録できる形がよいのでは。それにより新たな分野の才能の芽  
を見つけ、育てていくことも可能。  
…スタッフ希望者は経験がなくても、気持ちと熱意があればOKと門戸  
を広げておく。将来を見据えて若い人を育てていくことが肝要。  
…著名人ばかりでなく、まだこれから伸びそうな人にも出演してもらうこ  
とで、経費の節減を図るなどの工夫も必要。

上記を継続していく中で、三芳町の芸術文化コーディネーターを育成する。

## 3本の柱

ワクワク・ドキドキ  
—期待感—  
を大切にする

プロとアマもしくは一般との  
**交流。**

→その際、費用がかからないよ  
うな工夫ができれば参加し  
やすい

**ローカルカフェ**の定期  
的な開催。

- …ワクワクドキドキするものを探  
していきたい。
- …若い人の熱いエネルギーを  
感じ、経験を積んだ幅広い  
年代と一致協力して企画・  
行動することで、新たな可能  
性が生まれるのでは。
- …町民の声を芸術文化の発  
展に活かす機会をつくる。
- …町民が三芳への愛着をもち、  
芸術文化への意識を高める  
ために、企業や地域と連携  
する。

**文化祭**は子どもから大人まで集える絶好の場。

子どもも大人も気楽に参加できる町民主体の文化祭が開催できたら、  
町民文化祭のテーマ「未来につなげよう三芳の文化」に近づける。  
町民文化祭が、年ごとに盛り上がっていったら素晴らしい。

- …みんなと一緒に参加出来るものを取り入れる
- 例) ・ダンス類の実演と講習、合唱や合奏の飛び入り参加、太鼓  
を含む様々な楽器の共演など
- …ふらりと訪ねた人でもその場で参加できるような企画を増や  
し、気軽な、もっと幅を広げた取組みとする。
- ・みんなで合唱、演奏する
- …第九（歓喜の歌）を演奏。楽器・歌どのパートにでも誰で  
も参加OK。楽譜は前もって事務局が用意し、それを各自が  
ダウンロードし、当日集まってきた人全員で演奏をするとい  
うもの（東京国際フォーラムで毎年開催されている「ラ・フォル  
ジュルネ・オ・ジャポン」という国際音楽祭の前夜祭で実際  
に行われたイベントの一つ）。子どもからお年寄りまで、音楽の  
楽しさを体感できる楽しい企画。

## 文化祭デー

- …その日一日中、町のどこかで、  
林で、広場で音楽が聞こえ  
る。
- …各団体の演奏に付随する  
形で（あるいは合間に）、  
一般の人が誰でも体験し  
たり参加できるコーナーがある。

→より楽しくなり、  
参加者も増える。

企画例)

- ・作品展
- ・サークルの発表
- ・中学校の合唱
- ・吹奏楽の発表
- ・郷土芸能等

## イベント

- …買い物ついでに立ち寄れる  
ものが頻繁にあると良い。
- …プロアマ問わない。

## 3本の柱

公共性と獨創性を  
尊重する

### 資料3

## ローカルカフェで出された意見

小学生から70代の方まで、幅広い方が参加して行われたローカルカフェ（提言書「3.2」）で書かれた落書きを、敢えて原文そのままに掲載します。

日時：平成26年9月28日（日）

9：30～12：30

場所：藤久保公民館ホール

参加者：62人

内容：テーマ1「子どもにとってすてきなまちってなに？」

テーマ2「子どもにとってすてきな芸術文化ってなに？」

### ■子どもにとって素敵なまちづくりってなに？

#### ◆三芳町

- ・地域差がある 上富・竹間沢・北永井・藤久保・みよし台
- ・安全安心なまち 通学路や歩道の安全
- ・現状がステキな町なのか問題
- ・個性を認めてもらえるまち！個性を發揮出来る場があるまち！
- ・生き物が多い（カブトムシ・セミ）
- ・地域特性
  - 竹間沢 地元多 団結力が強い
  - 藤久保 転入多
  - みよし台 転入多
- ・自然と親しみ遊べるまち
  - 緑地公園でかぶと虫ととれる
  - 子どもたちの交流の場がある
  - 雑木林・お寺で音楽をする 合唱祭が盛んなので
- ・三芳のよさ
- ①雑木林 ②かぶとむしの町 ③合唱が盛ん（交流がない） ④藍染体験（藍が盛んだった） ⑤マンスリー（ワンコイン） ⑥文化祭（未来につなごう三芳の文化）
- ・緑があるすばらしさ
- ・町の伝統 地区意識の強い（竹間沢） つながり（連絡）
- ・安心して学校、保育園へ行ける
- ・緑の環境を生かしたまち
  - 雑木林の中での演奏やスケッチ
- ・町（地区）あげての活動が大切。
- ・安心な町
  - 安心してスポーツ、音楽に打ち込める。

#### ・ハモれる町

- ・虫がいる（カブトムシなども） — 生き物がいっぱいいる 生態系の充実
- ・虫がいる。（楽しい）
- ・川 水辺
- ・ボランティアががんばっている
- ・町全部好き！！

#### ◆町の芸術文化

- ・コピス アウトリーチ事業 … 子どもたちが触れあえてとても良い！
- …音楽の授業にプロの方が来て下さるなど、授業時間を変更しなくても実現は可能
- ・ハーモニー ロビーコンサートで町を音楽でたくさんに！
- ・藍染め体験 竹間沢 江戸時代 あいだいじん 昔からの…
- ・竹間沢マンスリー プロフェッショナルコンサート
- ・夜神楽
- ・「映画」（みよし物語）

#### ◆場所・拠点

- ・子どもの意見を聞いたまちづくりが必要！（公園等） ← ハード
- ・伝統を残し、受け継ぐ大切さ（お囃子など）
- ・児童館…小中学生、高校生 生きる学び
- ・大人と子どもが話せる場
- ・皆で集まれる場所がない
- ・大人の町づくりはハード面 → 目に見える部分
- ・自由に遊べる場所がない
- ・三芳には公園があるが、ボール投げできない
  - 禁止条例が多い



- ・外で遊べる場所がある
- ・友だちと交流する場所、機会がある
- ・キャッチボールできない、花火できない けど花火やりたい
- ・緑が多いけど、遊べる公園がない
- ・遊ぶところほしいー
- ・親、地域の協力が必要！
  - ボール禁止の公園、花火ができる
- ・楽器の練習場所
- ・公園にバスケットゴール
- ・運動できる場づくり
- ・人とかがわって遊ぶ場
- ・空き地の活用 … 気軽に練習 自由に活用
  - … スペースで楽しく活動する
- ・憩いの公園づくり（ベンチ等）
- ・遊ぶところ（公園）
- ・スポーツを行う施設（自由に）
- ・空き地活用
- ・球遊びができる公園がない
- ・幼児向け 遊ぶ場所 公園のあり方
  - （例）町田 — 学校校庭 → 芝生にしている → 走り回っている
- ・まち — 遊ぶスペースがない
- ・花火できない
- ・こぶしの里
  - 子どもたちだけで行かせられない
  - ↑ 今の子どもは大変だ！！
- ・-space-
- ・交流
  - コミュニケーション 世代を超えた → 場所（駄菓子屋さん）— 自由広場

#### ◆イベント

- ・ソフト面 ← イベント
- ・「場所」「モノ」ではなく、「機会」が欲しい。子どもが楽しめる機会。「イベント」ではなく「コミュニティ」。
- ・楽しめる場所をふやしてほしい — イベント
- ・三芳町には「イベント」がたくさんある
  - ↑ 情報が生かされていない
- ・幸せのイベント

#### ◆文化祭・学校行事

- ・文化祭の問題 → たくさん参加できるように
- ・中学の行事
  - 規模を縮めず 文化祭 体育祭 合唱祭 毎年変わらず行事がある
- ・竹間沢小 こてき
- ・中学校どうしでの交流 ← ジュボラがあるよ
  - … ロビーコンサート、合同合唱祭など、もっと増やしてほしい
- ・よその中学校と交流を増やす 例) 合唱祭を合同に

#### ◆学校

- ・学校の建物に（文化・芸術）楽しさが少ない、特徴をもつものに
- ・中学校で自然と触れ合う機会がない
- ・学校全体の取り組み
- ・音楽 美術
- ・子どもに伝えよう 英語の時間とかに
- ・学校全体の取組み
- ・学校での総合学習の時間は大事
- ・車人形やお囃子を体験 老人ホームでの体験（三芳中） 体験が先の方が良い

#### ◆地域行事

- ・運動会の練習で、徐々に子どもたちと接してエネルギーと楽しさを感じた
- ・三芳町の中でも地域によって参加人数がかなり違う
- ・町民体育祭を中心に
- ・地区ごと頑張って体育祭等まとまる
- ・町民体育祭などに向けて、地区ごとに力を合わせてがんばっている。そういうところが好き。
- ・町行事 みんなで力を合わせる

#### ◆地域組織

- ・「子ども会」・・・子どもが自分たちで連絡取り合って集まったり、自分たちのやりたいことを集まってやる会。「育成会」・・・親が子ども会をサポートする会

・ジュニアボランティアで活動している → 友達に誘われた → エコクラブ → 自然をもっと大切にしよう！！

・自然を学ぶ場がある  
→ 竹の子エコクラブ 県のしらこぼと賞 受賞

… 14年前に竹の子エコクラブスタート  
… 子どもたち（小中学生）とサポーターで構成

… 子ども主体で自然の中に入り、楽しむ  
… 自然に癒されている  
… 自然に学ぶ  
・（ジュボラ）（竹ノ子クラブ）

#### ◆情報

・情報の流し方  
・情報が伝わってない？ 発信方法！！  
・情報をあちこちに  
・情報を発信  
・地域 — 情報 交流  
・情報共有  
・駅からの発信（スーパーもコンビニも）  
→ 子育て世代の人に効果的  
・学校からのお知らせを親が見ていない？  
・どうやって広めるか？

#### ◆何を大切にするか・やるべきこと

・子どものコミュニティがどうなっているか？ 大切なもの！  
・子どもとの会話、気持ちを反映する  
・子どもの感性を引き出す  
・ソフト面は子どもに任す  
→ 目に見えない部分  
… 子どもたちによる素敵な町づくりの第一歩  
・子どもたちを良い環境においてあげる  
・子どもたちだけで町づくりを考える機会をつくる  
・子ども中心に お金のかからない方法で 楽しみながら作っちゃおう！！  
・子どもたちが楽しめるきっかけ 小学校4年生と生葉藍染しました  
・子どもの目線でみる  
・子どもたちが何をステキと考えるか  
・子どもが主 → 大人は見守る

・子どもの感性を大事に。  
・子どもはOPEN  
・子ども目線！！  
・子どもとのふれあい — 交流  
・子どもの知らない世界に触れる機会づくり  
・感性を引き出すには自然 もっと子どもたちを引っ張りだそう！！  
・大人の参加が大切  
・大人がまちの良いところを子供にみせて（体験させて）あげる  
・大人からの押し付けは、子どもがついてこない（三富体験etc.）  
・大人教育  
・大人が手本を示す  
・大人と子どもの目線ちがう  
・三芳町のいいところを、大人たちは教えるべきです  
・大人が尊重すべき ⇒ 大人が変わる必要がある  
・地域の文化を、子どもを含めて守っていく空気が欲しい  
・地域の人と交流・学ぶ・体験  
・他のとの交流  
・世代間の交流  
・他の年代との交流ができる  
・コミュニケーション力の強さ  
・コミュニケーション力を育てる  
・あいさつ  
… 明るくなる。 大人 子ども 男女  
・中3の希望 → 町のみんながあいさつをする。 ちょっとした立ち話をする。  
↑ 東中はみんなが共有できている。だから雰囲気がとても良い。  
・感性の向上を（児童館）  
・×お金はかかりません（予算ではない）  
・芝居 地域で鑑賞できるとよい  
・本物に触れる  
・感性を豊かにする  
・一流の音楽を聴くことができる  
・きちんとした場 経験ができる場（例えば正装して演奏を聴くなど）  
・プロと体験がある  
・プロフェッショナルな方々との交流

- ・町在住のプロに協力を願う
- ・自分たちが教える側に... すぐいきいきとしている！
- ・いろいろな経験ができるように。
- ・やるきっかけが必要です
- やりはじめたらおもしろい ← チームでやろう
- ・なぜ やらない できない どうしたら実現できるか考える！！
- ・資金面は工夫で
- ・駄菓子屋
- ・笑顔あふれる野外映画
- ・親を巻き込む — 子どもから伝わらない?? 内容
- ・緑の中での演奏や絵を描く
- ・体験 — 長期計画 — 実施
- ・外に出る活動
- ・安全に楽しく
- ・安全、安心 — ガキ大将必要
- ・安全・安心 緑 タヌキ 音楽
- ・地域を知りたい。やってみよう！
- ・小学生のお神楽 — みんなで盛り上げる
- ・知らない世界を知りたかった — 交流
- ・手話文化をつなげていこう！
- ・楽しそう！
- ・笑顔

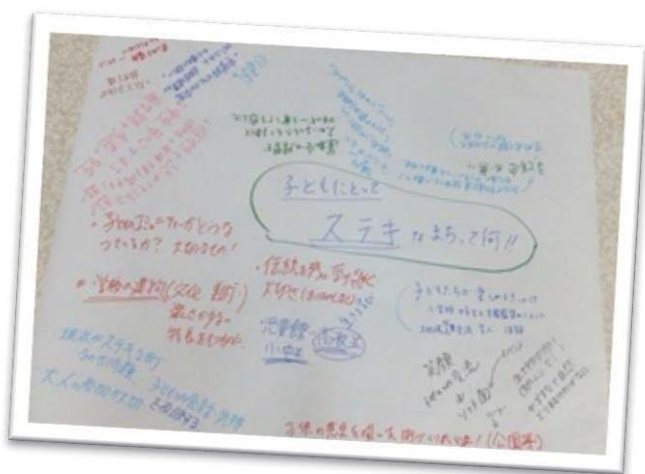
#### ◆課題

- ・親の仕事忙しい — 子を参加させにくい
- ・大人の役割
- ・子どもを参加させるには、親を巻き込む必要がある。
- ・国も財政が危ない 町も財政が危ない 我が家も会社も財政が危ない
- 子どもを幸せにするには？
- ・大人の地域に対する社会性が弱い
- ・あいさつが少ない
- ・参加者問題どうするか？ ← 参加者が同じ
- ・お囃子と行事が重なる（運動会）
- ・車・自転車の運転など → 交通安全の意識
- ・大人同士でかくし事。（?）
- ・自由度の向上
- ・大人の理解
- ・吹奏楽の環境

- ・子どもと大人のギャップ感
- ・今の子どもたちに、物はあるけど、自由はない
- ↑ このバランスをどうするか
- ・子どもだけではできない
- ・お金 — 運搬
- ・予算面（芸術について）
- ・子どもの安全について（街灯等）
- ・子ども騒音って？
- ・大人は大人同士で何かを隠している。子どもみたいにオープンでない。隠す
- ・ステキ=何？
- 子どもと大人のギャップがある
- 自由にできることを言う
- ・子だけでは無理。チームや大人の力も必要
- ・不幸
- 何でも手に入る ← ための努力があった
- ・子どものやる気はどこに？
- ・時には危険も必要
- ・今の子どもたちは楽しくやっている
- ↑ もっともっとになっていく

#### ◆その他

- ・今、三芳町 音楽に力を入れている
- 音楽が完成を豊かにする一番の早道
- ・音楽 — 感動 ボランティア 元気づける
- ・指導者 松本先生すでにステキ
- ・食べ物がなかった
- ・小学生 中学生 大学生 … 学校
- ・小1～6 児童館



## ■子どもにとってステキな芸術文化ってなに？

### ◆芸術文化とは

- ・子どもが考える 子ども中心の音楽活動 芸術活動
- ・音楽、絵画、彫刻、踊り、お祭り、伝統文化（車人形、里神楽）
- ・一人より仲間と集まって楽しみたい
- ・ex人形劇の町 どこでも触れられる
- ・伝統芸能
- ・紙芝居
- ・地域文庫 → 人形劇
- ・大人と一緒にの祭り文化
- ・焼きイモ技術（スムーズな）
- ・芸術文化  
↑ 伝統芸能 自己のアイデンティティ形成
- ・芸術文化  
… 日本の文化 守っていききたいもの
- ・文化  
… 舞踊 藍染 手話 雑木林 神楽 車人形
- ・「昔の生活」を残す活動
- ・昔の生活を残す活動（火おこしなど）
- ・歴史を残す  
— それを子どもが体験 三富新田の見学等
- ・支えるもの 芸術文化 おもしろい
- ・文化 — 文明につながるもの
- ・芸術文化 ← 子どもそのものだ！！
- ・地域とコミュニケーションを取れる人、ネットワーク
- ・芸術文化（生のもの）
- ・日常の中での芸術文化 → 触れる
- ・生きがい
- ・人生のスパイス
- ・芸術文化って…
- ・里神楽
- ・車人形 コピスで公演 → 12/21来てね！
- ・勾玉づくり
- ・笑顔
- ・非日常の
- ・声に出そう！
- ・楽しいのがいい！
- ・何も考えずに… ダンス… 楽しい感覚
- ・絵画

- ・演劇 … 取組み 芸術監督の導入・演劇  
→ 自己表現力を養う 自己表現をする力作り
- ・音楽 ⇔ OTOMACHI
- ・口笛
- ・ダンス — リズム楽しい
- ・子どもの目線 … 身近なものを見たとおりに表現
- ・子どもの絵はおもしろい

### ◆三芳町と町の目指すべき姿

- ・育て合う芸術文化
- ・絵とかアウトリーチで触れる  
→ 家庭で話す → 拡がる
- ・三芳の町の歴史を再確認しよう  
→ 知らないと町への愛着わかない 中学によって、実施している … 例) 車人形
- ・3万8千人のイベント  
— 三芳は皆で何かをするのが好き
- ・三芳は仲良しの町
- ・Mailでのイジメがない町
- ・三芳は仲良し ← お金?なくてもできる
- ・三芳町のイメージが笑顔
- ・雑誌っぽくなってかなり見る人が増えた  
→ 広報でアピール
- ・まちでは、吹奏楽部の活動が盛ん センtral病院や北永井での演奏の機会

### ◆疑問

- ・子どもは何を素敵と思うか？
- ・芸術文化って？くくりが難しい  
→ 自分も 他人も 仲間と ワクワクドキドキ人間の生きる力  
= 本物体験（音楽）プロの演奏家の指導  
アウトリーチ 演奏会への誘導
- ・なんでこんなテーマ？
- ・主催はどこ？ プロデュース
- ・児童館ならではの遊び

### ◆注意点

- ・町を知って、好きになってから要望しよう。自分が動かないとだめ。
- ・与えるだけの一方通行ではない

- ・育てていくもの、育て合うものではないか
- ・大人の事情で振り回してはダメ！
- ・成り立ちをして、活動に入っていく
- ・大人だけでは絶対だめ
- ・大人の都合を押し付けない。
- ・子どもに絞らず、大人から率先して活動を！
- ・参加 大人が？ かり 子どもの気持ちわかってでないステキでなくなる
- ・大人の考えと子どもの考えでステキは違うのでは？ 子どもを中心に、自由度を高く
- ・子どもの気持ちをくみとっての活動
- ・ただやるだけじゃいや
- ・吹奏楽 マジでやりたーい
- ・目標
- ・大人が負を残さない
- ・お金なくても工夫次第で
- ・一人ずつの感じ方がちがう

#### ◆現状で良いもの

- ・マンスリースクエアー
  - … 身近、交流、敷居が低い
- ・アウトリーチを活用
- ・ワークショップ企画
- ・ワークショップ体験
- ・ワークショップ + 東フィル
- ・エコクラブ活動 落ち葉掃き → 環境づくり
- ・最初から大きく考えすぎずに。みんなで少しずつ作っていくということ 面白いと思う。

#### ◆現状と課題

- ・中学校 文化祭 東中を除いてなし 一環したルールが必要
- ・文化祭がない（東中のみある）
  - 勉強ではない大切なもの
- ・東中にしか文化祭がない
- ・文化祭がない - 町内で一校だけ
- ・中学に応援合戦がない？！
- ・運動会はあるが、応援団がない
- ・今は、運動部は多いけど、文化部が減った
  - 間口が狭まっている
- ・指導者も必要
- ・中学海外交流

- ・海外派遣がよかった
- ・自由度
- ・子どもたちが守られている→大人が守りたがっている
- ・子に本物の楽器を経験させることが良かった
  - ↑ 参加の¥の問題
- ・三芳中 地域の方との交流
  - ↑ 総合学習 地域の方を講師にしてる
- ・総合学習
  - 多くの体験をしている（お囃子等）
- ・吹奏楽 — お金がかかる — 家庭
- ・生活水準
- ・もっといろいろなジャンルで体験ができるとよい。
- ・三芳は活動家も多い — 交流
- ・大人の参加のために、広報の努力もいるよね
- ・騒音じゃなーい！！
- ・音楽
  - 騒音として苦情がきてしまう → 理解を
- ・体験が必要
- ・中3の意見「聴くだけじゃなく、自分も体験したい」
- ・芸術体験 お手紙 → 学校で配られる
- ・竹の子エコクラブ シラコバト賞受賞！！
- ・子どもの参加が少ない！
  - もっと機会を増やそう。
- ・×ほこり
- ・ホルン 重い…

#### ◆必要なこと

- ・演奏会など、アーティストと学校などでも触れ合うことをする。
- ・学校の文化祭（交流〔住民・プロ〕・充実〔目標の一つに〕・学び〔多様な学びに〕）
- ・想像力
- ・たくさん場所で触れられる
- ・適性を早くみつける
- ・コーディネーターの必要性
- ・プロの音楽を聴くことの大切さ
- ・体験すること
- ・子どもに本物の芸術をみせる
- ・子どもに触れさせる機会を制限しない
- ・子どもの頃の体験は大事



- ・基本は継続 学校・町・民間の三位一体  
→活用
- ・子どもが主体となって
- ・活動は、小さなきっかけから発展していく！！
- ・文化を支えるスポンサーが必要
- ・芸術文化 音楽が身近 人と一緒にやることでステキさもつながる
- ・自分にとっての芸術文化は人それぞれ いろんな視野で広げていく
- ・文化祭は楽しい みんなで作り上げる達成感
- ・一緒に体感する
- ・体験が大切！！
- ・いろんな体験
- ・大人も共に育たないといけない
- ・子どもが参加できない理由  
→ お金、親の協力大人の協力は必要
- ・「みんなでひとつの物を作る」ということに意味がある。 — 音楽でも絵でもなんでも。
- ・多くの体験をさせる。その中で自分に適したものを！
- ・きっかけ！！ — 楽器体験 一緒に演奏
- ・大人と子どもで考えを共有
- ・大人は見守りをする
- ・競争（目標）
- ・目標をもって
- ・町内の学校全校で発表
- ・中学の総合学習の時間  
… 上級学校に割く時間より違うものに
- ・親  
… 子どもが芸術そのもの 子育てが芸術活動である！ + 子ども 子どもは芸術家 ← 大人がダメにする — 大人が工夫する  
… 芸術家は環境が育てる 教育ではない
- のびのびといきいきと育つのか
- ・子どもが自主・自発
- ・1つのものをつくり上げる
- ・消極的な子どもフォローしていく  
→ 学校も交えた活動
- ・指導者、大人との出会い
- ・感性を引き出すお手伝い
- ・アウトリーチ（→継続していく）の美術活動も！！

- ・子どもたちが自分たちで何かをさせる ← これも文化
- ・芸術文化にふれるには 親の背中をみて育つ → まず親から
- ・親から → 子 → 孫への伝承！！
- ・芸術文化の成り立ちを知る
- ◆必要なもの
- ・発表する場を
- ・発表する場が必要 — スポーツは？場が多い
- ・活動の発表の場 コピスの使用料が高い！
- ・吹奏楽の発表の場を増やす  
— 三芳中はあるけど、三芳東中はない
- ・発表の場を！
- ・練習の場を
- ・子どもたちが自由に遊べる広い空間が欲しい
- ・たまり場
- ・交流の場
- ・お金が必要！
- ◆提案
- ・ストリートミュージシャンと野菜市等のコラボ
- ・街頭、広場、公園でのふれあい演奏（パフォーマンス） — 野菜販売とコラボ
- ・日常の中で聴けると、子どもと一緒に体感できる
- ・学校 町 企業とコラボでプロデュース！！
- ・固定の場所以外で、日常で触れられるといいな  
… 学校だと子だけ → その後もフォローする（コピスでコンサートとか ← 高い）
- ・鑑賞だけでなく実技指導やワークショップ
- ・中学校での文化祭の充実（プロの参加とか刺激を） → 伝統へ
- ・芸術 … 音楽 絵画 書道 華道  
— 音楽 町と学校と企業のコラボ  
— 演劇 自己表現、自信、一流のプロの演奏を聴く、機会をつくる
- ・CD録音の過程を体験させる
- ・地域のみんなで地域に来てる旅劇団や野外映画見る（小学校などの校舎の壁に映す）
- ・子どもローカルカフェの開催を
- ・こどもワールド（ローカル）カフェをやろう！



- ・プロとの交流を！
- ・プロの人形劇
- ・プロのものを見せる
- ・旧島田家を使つての昔の文化伝承を図る
- ・文化を支えるシステムを作る
  - 資金を含めて
- ・学校間の交流会 → 住民への宣伝 広報
- ・リーダーの導入
- ・コピスに芸術舞台監督（プロデューサー）をおく
- ・プロデューサーが必要 支える組織が必要
- ・演者 子どもだけの参加 — 大人はスタッフにまわって、子どもの主体を邪魔しない
- 子どもに大切な経験をがっかりさせてはいけない
  - 芝居のワークショップ企画 例えば、シェイクスピアの一場面だけでも小ステージや公民館で発表するなど可能
- ・コピスに芸術監督
- ・プロのイベントにふれる 三芳町ホール（乗り合いタクシー） ロビーコンサート
- ・子どものミュージカル、芝居（プロの指導）
- ・子どもが経験できる場をもっと作る
- ・プロの演奏を聴く（中1年全員）
- ・コピスの横の緑地公園など野外での企画や体験参加
- ・雑木林コンサート
- ・年ごとテーマをしぼる
- ・将来的には
  - 町全体 … 全世帯 全地域 みんなで38000人の文化祭をやろう！
  - 365日 毎日が文化祭
- ・38000人の文化祭 ← ここがスタート
- ・学校をまきこんで、みんなが参加できるといい
- ・1人から始めて、人が増えるのもOK
- ・力を合わせて1つのものを作るのは大切！！
  - どんなものでもOK！最初から結果を決めず、どんな形になってもOK！！
- ・全世代で38000人の文化祭 → やってみるもんだ！ 最強の町 大人との交流 話し合いの場
- ・東中の「けやき祭」しかないのはだめだ！！他の中学校も文化祭をやろう。
- ・人をステキにさせる！！

- ・どこでも触れられるものがあるといいな！プロのものをお祭りとかラボさせて紙芝居とか
- ・保護者にも開放せよ！
- ・産業祭・福祉まつり 何か発信できないか
- ・ピアノ解体（ヤマハ） 紙スピーカー（HAMA） 手づくりトランペット（ヤマハ）
- ・ピアノの解体、分解（楽器）
- ・劇、映画 舞台裏の見学
- ・子ども運営とか…
- ・全町民参加の38000人の文化祭（道路を使った広がりパフォーマンスも）
- ・町の文化祭に、どんどん子どもたちを参加させる ← 大人も参加
- ・町民文化祭 ← 子どもの発表の場
  - 子どもが発表することで大人（家族）も参加する 地に根付く文化を育てる
- ・いつでも触れ合える場所があると 空き地、交差点のすみ、屋外でOK！
- ・合唱部がほしい
- ・野外フェス
- ・海外のアーティストの日本（三芳）での芸術交流 音楽 美術 書道
- ・村上隆 + 奈良美智
- ・板を使った洗濯 — 昔体験
- ・プロの演奏を！！ 感動する心を育む。身近に。公平に。
- ・音楽による街づくり → 体験型
- ・本物（プロ）の音楽をきける町にしてほしい。身近に！
- ・子どものときに本物を見、聴く
- ・企画をたくさん立てる
  - 子どもに体験させる（たくさん！）
- ・各地区ごとでの盛り上がり
  - 地区ごとでの交流 — 蓄積ができる
  - 5～10年後ぐらい
- ・子どもの頃から根を張らないと、育たないと思う。
- ・子どもは将来どうなるか。いろいろな可能性がある。
- ・今の子どもはすごい！

#### ◆子どもの想い

- ・外で遊びたい！
- ・本物に触れたい
- ・絵を描いたり、動きたい
- ・コンクール出場を増やして！
- ・本気でコンクールとか出たい
- ・本気で指導をしてくれる指導者を求めている！！
- ・子どもは本物を求めている！
- ・（吹奏楽）発表の場を多く
  - ↑ 外部からの指導者を入れてほしい
  - 学校間の差      スポーツ
- ・文化祭をなくさないで！
- ・資料館まつり
  - いんなみさんのクイズが難しかった！

#### ◆要望

- ・公園 目に触れる場所 町の中でも...  
誰でも聞ける！！
- ・公共の場でききたい
- ・専門的にやっていきたい
- ・芝居、美術も体験させたい！！
- ・音楽の文化をみんなに知ってもらいたい
- ・子どもの手話と音楽をつなげていきたい
- ・コーラスなどの歌を歌う場面を増やしていきたい
- ・また...スギテツ来て欲しい

#### ◆協力者候補

- ・ESPギター（竹間沢）
- ・古田土フルート etc.



主 催：三芳町芸術文化懇談会、三芳町政策研究所、三芳町、三芳町教育委員会  
協 賛：株式会社 ケイミックス、株式会社 木村屋總本店、株式会社 十勝大福本舗、  
株式会社 ヤオコー 三芳藤久保店  
（開催に際し、以上の企業より人的・物的支援をいただきました。ありがとうございました。）